

幽室及び松下村塾における教育とその一考察

—— 吉田松陰の教育像 (その二) ——

吉 村 忠 幸

序

前稿でも述べたように松陰の教育に関する論文や成書は少い。しかもその具体的な実践について分析されているものは殆どないといつてよい。この中で私の第一に明らかにしたかったのは幽室及び松下村塾で行った教育実践と彼自身が青年期までに勉強した事とのかかわりについてである。安政二年十二月に野山獄を出で、杉家の一室にこもり、いわゆる幽室時代の教育がやがて松下村塾の教育へ展開していくのであるが、ここでの教育実践は全く自由人としての教育である。彼が幽室にゐて、どのような教育を行ったかを、彼の日記を通し、また作文指導の実際から具体的に探ってみようと思う。このあたりの分析はどの成書にも出ていない。

第二は松下村塾での教育の理念と構想とがどのように形成されたかである。私は講孟余話の成立とのかかわりに於て、それが大きな意味をもつことを明らかにしたいと思う。

第三に松下村塾の構想と彼が兵学師範として独立した青年期に、明倫館再興についての意見書を上書している。これは彼の最初の教育思想であつて、これとどのようにかわるかにについて明らかにしたい。

第四に松下村塾の教育の構想と実践とが、彼の数少い学校論とどのような関連があるかにについて、明らかにしたい。

第五は松下村塾における教育の形式については体系的でないにしても、いろいろの成書でとりあげられている。しかし松陰の村塾における教育の契機及びその変化ならびに、教育における愛の契機については誰も明らかにしていない。この点を明らかにしようと思う。

一、幽室における教育実践と教育思想

(一) 日記に見られる教育実践

安政二年十二月十五日野山獄を出た松陰は杉家の一室に籠ることになった。この一室を幽室と称し、「足戸庭を出でず、席故旧をひかず、室を掃いて静処し独り書と親しむ」(三三)生活に入った。そして翌々日に、父兄玉木叔父や親戚の子弟に対して、獄中について孟子講義が始った。このことについては後で述べる。十二月十七日から二十四日までの記録はあるが、それ以後から翌安政三年の一月までの文献は少ない。二月も「丙辰幽室文稿」(三九)に九本あるだけで松陰の一月間の文献としては少い。孟子講義の始るのも三月二十一日からである。「野山獄読書記」の安政三年の項に(七五)一月以降の読書名がのっている。また二つの日記がある。「丙辰日記」(七五)、「丁巳日乗」(七六)これらから松陰の教育実践を見ることが出来る。これを表にすると次の如くなる。

対読した月日		対読した人々とその書名		備考
安政3・3・18	安政2・12・17	孟子講義	孟子講義	<p>註1 「野山獄読書記」に「為滝生読」と始めて獄外の人名が出る(廿三)また「十八日より廿四日了」とある。それが毎日であるかとびとびであるかはわからない。</p> <p>高須はこのとき二十二歳である。</p> <p>註2 玉木彦介は十六歳</p> <p>註3 「三日ヨリ十四日了」とある。毎日かどうかはわからない。</p> <p>佐々木亀之助も二十二歳</p> <p>註4 「二日ヨリ、為佐梅読」とある。亀之助の弟で十七歳</p> <p>註5 「廿日ヨリ、高・玉両生」とある。この日始めて二人同時になる。</p> <p>註6 これからは「丙辰日記」この日は四人を同時に対象としている。</p> <p>註7 このあと「歯痛廃業」として、九月一日まで休んだ。</p> <p>註8 山賀の名は不明。山賀と倉橋の勉学はつづいていない。</p>
安政3・3・21	安政3・3・24	孟子講義	孟子講義	
4・2	3・24	外史十四 (註1)	高須滝之丞	
6・14	6・3	(註3)	文章軌範 (註2)	
7・2	7・20	陳竜川文一	陳竜川文一 (註5)	
8・22 (註6)	8・23	武教全書	武教全書	
8・25	8・26	(註7)	通鑑	
8・26	8・27	通鑑	通鑑	
9・2	9・3	通鑑	武教小学	
9・4	9・5	武教小学	通鑑	
9・5	9・6	武教小学	通鑑	
9・6	9・7	武教小学	通鑑	
9・7	9・8	武教小学	通鑑	
9・8	9・9	武教小学	通鑑	
9・9	9・10	武教小学	通鑑	
9・10	9・11	武教小学	通鑑	
9・11	9・12	武教小学	通鑑	
9・12	9・13	武教小学	通鑑	
9・13	9・14	武教小学	通鑑	
9・14	9・15	武教小学	通鑑	
9・15	9・16	武教小学	通鑑	
9・16	9・17	武教小学	通鑑	
9・17	9・18	武教小学	通鑑	
9・18	9・19	武教小学	通鑑	
9・19	9・20	武教小学	通鑑	
9・20	9・21	武教小学	通鑑	
9・21	9・22	武教小学	通鑑	
9・22	9・23	武教小学	通鑑	
9・23	9・24	武教小学	通鑑	
9・24	9・25	武教小学	通鑑	
9・25	9・26	武教小学	通鑑	
9・26	9・27	武教小学	通鑑	
9・27	9・28	武教小学	通鑑	
9・28	9・29	武教小学	通鑑	
9・29	9・30	武教小学	通鑑	
9・30	10・1	武教小学	通鑑	
10・1	10・2	武教小学	通鑑	
10・2	10・3	武教小学	通鑑	
10・3	10・4	武教小学	通鑑	
10・4	10・5	武教小学	通鑑	
10・5	10・6	武教小学	通鑑	
10・6	10・7	武教小学	通鑑	
10・7	10・8	武教小学	通鑑	
10・8	10・9	武教小学	通鑑	
10・9	10・10	武教小学	通鑑	
10・10	10・11	武教小学	通鑑	
10・11	10・12	武教小学	通鑑	
10・12	10・13	武教小学	通鑑	
10・13	10・14	武教小学	通鑑	
10・14	10・15	武教小学	通鑑	
10・15	10・16	武教小学	通鑑	
10・16	10・17	武教小学	通鑑	
10・17	10・18	武教小学	通鑑	
10・18	10・19	武教小学	通鑑	
10・19	10・20	武教小学	通鑑	
10・20	10・21	武教小学	通鑑	
10・21	10・22	武教小学	通鑑	
10・22	10・23	武教小学	通鑑	
10・23	10・24	武教小学	通鑑	
10・24	10・25	武教小学	通鑑	
10・25	10・26	武教小学	通鑑	
10・26	10・27	武教小学	通鑑	
10・27	10・28	武教小学	通鑑	
10・28	10・29	武教小学	通鑑	
10・29	10・30	武教小学	通鑑	
10・30	11・1	武教小学	通鑑	
11・1	11・2	武教小学	通鑑	
11・2	11・3	武教小学	通鑑	
11・3	11・4	武教小学	通鑑	
11・4	11・5	武教小学	通鑑	
11・5	11・6	武教小学	通鑑	
11・6	11・7	武教小学	通鑑	
11・7	11・8	武教小学	通鑑	
11・8	11・9	武教小学	通鑑	
11・9	11・10	武教小学	通鑑	
11・10	11・11	武教小学	通鑑	
11・11	11・12	武教小学	通鑑	
11・12	11・13	武教小学	通鑑	
11・13	11・14	武教小学	通鑑	
11・14	11・15	武教小学	通鑑	
11・15	11・16	武教小学	通鑑	
11・16	11・17	武教小学	通鑑	
11・17	11・18	武教小学	通鑑	
11・18	11・19	武教小学	通鑑	
11・19	11・20	武教小学	通鑑	
11・20	11・21	武教小学	通鑑	
11・21	11・22	武教小学	通鑑	
11・22	11・23	武教小学	通鑑	
11・23	11・24	武教小学	通鑑	
11・24	11・25	武教小学	通鑑	
11・25	11・26	武教小学	通鑑	
11・26	11・27	武教小学	通鑑	
11・27	11・28	武教小学	通鑑	
11・28	11・29	武教小学	通鑑	
11・29	11・30	武教小学	通鑑	
11・30	12・1	武教小学	通鑑	
12・1	12・2	武教小学	通鑑	
12・2	12・3	武教小学	通鑑	
12・3	12・4	武教小学	通鑑	
12・4	12・5	武教小学	通鑑	
12・5	12・6	武教小学	通鑑	
12・6	12・7	武教小学	通鑑	
12・7	12・8	武教小学	通鑑	
12・8	12・9	武教小学	通鑑	
12・9	12・10	武教小学	通鑑	
12・10	12・11	武教小学	通鑑	
12・11	12・12	武教小学	通鑑	
12・12	12・13	武教小学	通鑑	
12・13	12・14	武教小学	通鑑	
12・14	12・15	武教小学	通鑑	
12・15	12・16	武教小学	通鑑	
12・16	12・17	武教小学	通鑑	
12・17	12・18	武教小学	通鑑	
12・18	12・19	武教小学	通鑑	
12・19	12・20	武教小学	通鑑	
12・20	12・21	武教小学	通鑑	
12・21	12・22	武教小学	通鑑	
12・22	12・23	武教小学	通鑑	
12・23	12・24	武教小学	通鑑	
12・24	12・25	武教小学	通鑑	
12・25	12・26	武教小学	通鑑	
12・26	12・27	武教小学	通鑑	
12・27	12・28	武教小学	通鑑	
12・28	12・29	武教小学	通鑑	
12・29	12・30	武教小学	通鑑	
12・30	1・1	武教小学	通鑑	
1・1	1・2	武教小学	通鑑	
1・2	1・3	武教小学	通鑑	
1・3	1・4	武教小学	通鑑	
1・4	1・5	武教小学	通鑑	
1・5	1・6	武教小学	通鑑	
1・6	1・7	武教小学	通鑑	
1・7	1・8	武教小学	通鑑	
1・8	1・9	武教小学	通鑑	
1・9	1・10	武教小学	通鑑	
1・10	1・11	武教小学	通鑑	
1・11	1・12	武教小学	通鑑	
1・12	1・13	武教小学	通鑑	
1・13	1・14	武教小学	通鑑	
1・14	1・15	武教小学	通鑑	
1・15	1・16	武教小学	通鑑	
1・16	1・17	武教小学	通鑑	
1・17	1・18	武教小学	通鑑	
1・18	1・19	武教小学	通鑑	
1・19	1・20	武教小学	通鑑	
1・20	1・21	武教小学	通鑑	
1・21	1・22	武教小学	通鑑	
1・22	1・23	武教小学	通鑑	
1・23	1・24	武教小学	通鑑	
1・24	1・25	武教小学	通鑑	
1・25	1・26	武教小学	通鑑	
1・26	1・27	武教小学	通鑑	
1・27	1・28	武教小学	通鑑	
1・28	1・29	武教小学	通鑑	
1・29	1・30	武教小学	通鑑	
1・30	2・1	武教小学	通鑑	
2・1	2・2	武教小学	通鑑	
2・2	2・3	武教小学	通鑑	
2・3	2・4	武教小学	通鑑	
2・4	2・5	武教小学	通鑑	
2・5	2・6	武教小学	通鑑	
2・6	2・7	武教小学	通鑑	
2・7	2・8	武教小学	通鑑	
2・8	2・9	武教小学	通鑑	
2・9	2・10	武教小学	通鑑	
2・10	2・11	武教小学	通鑑	
2・11	2・12	武教小学	通鑑	
2・12	2・13	武教小学	通鑑	
2・13	2・14	武教小学	通鑑	
2・14	2・15	武教小学	通鑑	
2・15	2・16	武教小学	通鑑	
2・16	2・17	武教小学	通鑑	
2・17	2・18	武教小学	通鑑	
2・18	2・19	武教小学	通鑑	
2・19	2・20	武教小学	通鑑	
2・20	2・21	武教小学	通鑑	
2・21	2・22	武教小学	通鑑	
2・22	2・23	武教小学	通鑑	
2・23	2・24	武教小学	通鑑	
2・24	2・25	武教小学	通鑑	
2・25	2・26	武教小学	通鑑	
2・26	2・27	武教小学	通鑑	
2・27	2・28	武教小学	通鑑	
2・28	2・29	武教小学	通鑑	
2・29	2・30	武教小学	通鑑	
2・30	3・1	武教小学	通鑑	
3・1	3・2	武教小学	通鑑	
3・2	3・3	武教小学	通鑑	
3・3	3・4	武教小学	通鑑	
3・4	3・5	武教小学	通鑑	
3・5	3・6	武教小学	通鑑	
3・6	3・7	武教小学	通鑑	
3・7	3・8	武教小学	通鑑	
3・8	3・9	武教小学	通鑑	
3・9	3・10	武教小学	通鑑	
3・10	3・11	武教小学	通鑑	
3・11	3・12	武教小学	通鑑	
3・12	3・13	武教小学	通鑑	
3・13	3・14	武教小学	通鑑	
3・14	3・15	武教小学	通鑑	
3・15	3・16	武教小学	通鑑	
3・16	3・17	武教小学	通鑑	
3・17	3・18	武教小学	通鑑	
3・18	3・19	武教小学	通鑑	
3・19	3・20	武教小学	通鑑	
3・20	3・21	武教小学	通鑑	
3・21	3・22	武教小学	通鑑	
3・22	3・23	武教小学	通鑑	
3・23	3・24	武教小学	通鑑	
3・24	3・25	武教小学	通鑑	
3・25	3・26	武教小学	通鑑	
3・26	3・27	武教小学	通鑑	
3・27	3・28	武教小学	通鑑	
3・28	3・29	武教小学	通鑑	
3・29	3・30	武教小学	通鑑	
3・30	3・31	武教小学	通鑑	
3・31	4・1	武教小学	通鑑	
4・1	4・2	武教小学	通鑑	
4・2	4・3	武教小学	通鑑	
4・3	4・4	武教小学	通鑑	
4・4	4・5	武教小学	通鑑	
4・5	4・6	武教小学	通鑑	
4・6	4・7	武教小学	通鑑	
4・7	4・8	武教小学	通鑑	
4・8	4・9	武教小学	通鑑	
4・9	4・10	武教小学	通鑑	
4・10	4・11	武教小学	通鑑	
4・11	4・12	武教小学	通鑑	
4・12	4・13	武教小学	通鑑	
4・13	4・14	武教小学	通鑑	
4・14	4・15	武教小学	通鑑	
4・15	4・16	武教小学	通鑑	
4・16	4・17	武教小学	通鑑	
4・17	4・18	武教小学	通鑑	
4・18	4・19	武教小学	通鑑	
4・19	4・20	武教小学	通鑑	
4・20	4・21	武教小学	通鑑	
4・21	4・22	武教小学	通鑑	
4・22	4・23	武教小学	通鑑	
4・23	4・24	武教小学	通鑑	
4・24	4・25	武教小学	通鑑	
4・25	4・26	武教小学	通鑑	
4・26	4・27	武教小学	通鑑	
4・27	4・28	武教小学	通鑑	
4・28	4・29	武教小学	通鑑	
4・29	4・30	武教小学	通鑑	
4・30	5・1	武教小学	通鑑	
5・1	5・2	武教小学	通鑑	
5・2	5・3	武教小学	通鑑	
5・3	5・4	武教小学	通鑑	
5・4	5・5	武教小学	通鑑	
5・5	5・6	武教小学	通鑑	
5・6	5・7	武教小学	通鑑	
5・7	5・8	武教小学	通鑑	
5・8	5・9	武教小学	通鑑	
5・9	5・10	武教小学	通鑑	
5・10	5・11	武教小学	通鑑	
5・11	5・12	武教小学	通鑑	
5・12	5・13	武教小学	通鑑	
5・13	5・14	武教小学	通鑑	
5・14	5・15	武教小学	通鑑	
5・15	5・16	武教小学	通鑑	
5・16	5・17	武教小学	通鑑	
5・17	5・18	武教小学	通鑑	
5・18	5・19	武教小学	通鑑	
5・19	5・20	武教小学	通鑑	
5・20	5・21	武教小学	通鑑	
5・21	5・22	武教小学	通鑑	
5・22	5・23	武教小学	通鑑	
5・23	5・24	武教小学	通鑑	
5・24	5・25	武教小学	通鑑	
5・25	5・26	武教小学	通鑑	
5・26	5・27	武教小学	通鑑	
5・27	5・28	武教小学	通鑑	
5・28	5・29	武教小学	通鑑	
5・29	5・30	武教小学	通鑑	
5・30	5・31	武教小学	通鑑	
5・31	6・1	武教小学	通鑑	
6・1	6・2	武教小学	通鑑	
6・2	6・3	武教小学	通鑑	
6・3	6・4	武教小学	通鑑	
6・4	6・5	武教小学	通鑑	
6・5	6・6	武教小学	通鑑	
6・6	6・7	武教小学	通鑑	
6・7	6・8	武教小学	通鑑	
6・8	6・9	武教小学	通鑑	
6・9	6・10	武教小学	通鑑	
6・10	6・11	武教小学	通鑑	
6・11	6・12	武教小学	通鑑	
6・12	6・13	武教小学	通鑑	
6・13	6・14	武教小学	通鑑	
6・14	6・15	武教小学	通鑑	
6・15	6・16	武教小学	通鑑	
6・16	6・17	武教小学	通鑑	
6・17	6・18	武教小学	通鑑	
6・18	6・19	武教小学	通鑑	
6・19	6・20	武教小学	通鑑	
6・20	6・21	武教小学	通鑑	
6・21	6・22	武教小学	通鑑	
6・22	6・23	武教小学	通鑑	
6・23	6・24	武教小学	通鑑	
6・24	6・25	武教小学	通鑑	
6・25	6・26	武教小学	通鑑	
6・26	6・27	武教小学	通鑑	
6・27	6・28	武教小学	通鑑	
6・28	6・29	武教小学	通鑑	
6・29	6・30	武教小学	通鑑	
6・30	7・1	武教小学	通鑑	
7・1	7・2	武教小学	通鑑	
7・2	7・3	武教小学	通鑑	
7・3	7・4	武教小学	通鑑	
7・4	7・5	武教小学	通鑑	
7・5	7・6	武教小学	通鑑	
7・6	7・7	武教小学	通鑑	
7・7	7・8	武教小学	通鑑	
7・8	7・9	武教小学	通鑑	
7・9	7・10	武教小学	通鑑	
7・10	7・11			

月 日	(高 須)	(玉 木)	(佐々木亀之助)	(佐々木梅三郎)	(倉 橋)	(山 賀)	
12 ・ 1						晋 語	晋 語
11 ・ 25	(註13)	陳 竜 川 文				左 氏 伝	吉田栄太郎
11 ・ 4	(註12)	陳 竜 川 文		陰 徳 太 平 記		左 氏 伝	
10 ・ 28			通 鑑	陰 徳 太 平 記		左 氏 伝	
10 ・ 25			通 鑑			左 氏 伝	
10 ・ 24						左 氏 伝	
10 ・ 23					礼 記	左 氏 伝	
10 ・ 21		陳 竜 川 文	通 鑑		礼 記	左 氏 伝	
10 ・ 20		陳 竜 川 文	通 鑑		国 司 仙 吉	左 氏 伝	
10 ・ 14	(註11)		通 鑑	陰 徳 太 平 記		左 氏 伝	
10 ・ 13				陰 徳 太 平 記		左 氏 伝	註13 吉田栄太郎 始めて来たと ある。
10 ・ 11		陳 竜 川 文		陰 徳 太 平 記		左 氏 伝	
10 ・ 10				陰 徳 太 平 記		左 氏 伝	
10 ・ 8				陰 徳 太 平 記		左 氏 伝	
10 ・ 7			通 鑑			左 氏 伝	註12 4日あとの 空白については 理由不明
10 ・ 2			通 鑑			左 氏 伝	註11 14日のあと 二十日まで空白
9 ・ 25	陰 徳 太 平 記		通 鑑			増野徳民 (註10)	註10 増野が親類 以外の入塾者の 第一号である。 安政3・10・1
9 ・ 24		武 教 小 学	通 鑑	武 教 小 学	武 教 小 学		註9 11日～20日 までは空白
9 ・ 22		蒙 求					
9 ・ 21							
9 ・ 20	陰 徳 太 平 記						
9 ・ 11	(註9)						
9 ・ 7			通 鑑				

月 日	(岡部)	(玉木)	(佐謙)	(佐梅)	(国司)	(徳民)	(栄太郎)
12・6	(註14) 岡部繁之助	孝経	註14 高須は九月二十二日以降は来ていない。十二月八日から岡部が加わる。 註15 この頃途絶えがちで二十一日以降の日記はない。 註16 佐々木謙蔵は佐亀、佐梅と兄弟。 註17 正月二日から始っている。			孝経	孝経
12・8	外 父師善誘史法	外 史				外 史	外 史
12・10	兵 要録					唐 鑑	唐 鑑
12・17	兵 要録					唐 鑑	唐 鑑
12・18	外 父師善誘史法		註14 高須は九月二十二日以降は来ていない。十二月八日から岡部が加わる。 註15 この頃途絶えがちで二十一日以降の日記はない。 註16 佐々木謙蔵は佐亀、佐梅と兄弟。 註17 正月二日から始っている。			唐 鑑	唐 鑑
12・19	兵 要録					外 史	外 史
12・20	(註15)					外 史	外 史
安政4・1・2	(註17) 孟子	方正学文	佐々木謙蔵			經濟要録	經濟要録
1・3	孟子	孟子	孟子			孟子	孟子
1・4	外 史	方正学文				外 史	外 史
1・5	禹貢本文	禹貢本文			礼記		
1・6	外 史	外 史				外 史	外 史
1・7	禹貢	禹貢	禹貢		礼記	經濟要録	經濟要録
1・8	孟外子史	孟外子史	孟外子史			孟外子史	孟外子史
1・9						經濟要録	經濟要録
1・10	孟禹子貢	孟禹子貢	孟子			孟子	孟禹子貢
1・11	外 史	方正学文	外 史			外 史	外 史
1・13			外 史		礼記	經濟要録	經濟要録

月 日	1 ・ 14	1 ・ 15	1 ・ 16	1 ・ 17	1 ・ 18	1 ・ 19	1 ・ 20	1 ・ 21	1 ・ 22	1 ・ 23	1 ・ 24	1 ・ 25	1 ・ 26	1 ・ 27	1 ・ 28	1 ・ 29
(岡 部)	孟 子		武 教 全 書	外 史	武 教 全 書		外 史		武 教 全 書		孟 子					外 史
(玉 木)	孟 子	方 正 学 文	武 教 全 書	外 史	武 教 全 書		外 山 陽 詩 文 史	山 陽 詩 鈔	武 教 全 書	山 陽 詩 鈔	孟 子					外 史
(佐 謙)	孟 子		武 教 全 書		武 教 全 書		外 史									
(佐 梅)	孟 子				坤 輿 図 識	坤 輿 図 識		坤 輿 図 識			坤 輿 図 識		坤 輿 図 識		坤 輿 図 識	坤 輿 図 識
(国 司)																
(徳 民)	孟 子	経 済 要 録	武 教 全 書	外 史	武 教 全 書	坤 輿 図 識	外 史	山 陽 詩 鈔	武 教 全 書	山 陽 詩 鈔	坤 輿 図 識	外 史	外 史	坤 輿 図 識	長 門 金 匱	外 史
(栄 太 郎)	孟 子	経 済 要 録	武 教 全 書	外 史	武 教 全 書	坤 輿 図 識	外 史	山 陽 詩 鈔	武 教 全 書	山 陽 詩 鈔	坤 輿 図 識	外 史	外 史	坤 輿 図 識	長 門 金 匱	外 史

月	日	(岡部)	(玉木)	(佐謙)	(佐梅)	(国司)	(徳民)	(栄太郎)
2・1	2・3	中庸	方正学文		陰徳太平記	礼記	周南文	周南文
2・8	2・6	中庸			陰徳太平記		周南文	周南文
2・9	2・10	周南文	周南文				周南文	周南文
2・11								

安政三年の三月から安政四年二月までの幽室を訪れて学んだ者はすぐ来なくなった倉橋・山賀をふくめて十一名である。年齢のわかっているものを安政三年でみると、佐々木(亀)22歳、玉木と栄太郎が16歳、徳民と岡部が15歳、佐々木(梅)17歳、国司が11歳、佐々木(謙)は佐々木兄弟の二男であるから18歳、21歳で他の者は不明である。

年齢に差があるので、幽室の前者は初学であると断定はできない。

またその学習方法は「野山獄読書記」では「○○のために読む」とか「○○と読む」とあるので、対読が個人相手に行われたと見ることが出来る。また一覧表でみられるように、特定の個人に特定のテキストが用いられているものもあれば、折から来合わせたものには、参加させて前からの続きのテキストを用いたようなものもある。従って幽室での十一名の勉学に、今でいうカリキュラムがあったとは考えられない。これまで第一次江戸遊学(三歳~三歳)、第二次江戸遊学(三歳~三歳)で、江戸や大和でいくつかの私塾を見ているのであるから、その教育内容や教育方法に一つの見識があったと推測できるが、それとわかるような面は出ていない。しかし当時の明倫館の学制(後述)では八歳から十四歳をふくめて小学生とし、これに三科があり、その一つに「五経小学科」があり、その第二階の中等に、礼記春秋易経の素読があり、毎月三回試験があつて、合格したものを昇級させるといふ

制度があつた。国司仙吉は十一歳であり、礼記のみをひとり松陰の指導をうけているのはこの試験対策であつたと考えることが出来る。十五歳からは大学生としてその五科と学習法・試験方法は次表のようであつた。

五科(五等級)	学習法	試験法	備考
孝経小学科	聴講	講義(四題)筆答	対書問題は「孔子家語」から選ぶ
大学論語科	会読	同右	対書問題は「左伝」「国語」から選ぶ
孟子中庸科	独看	同右	同右
詩経書経科	などに よる	同右	対書は「史記」「通鑑綱目」から選ぶ 策問は事務問題
易経礼記春秋科		並びに策問(二問)	同右

佐々木亀之助、増野徳民、吉田栄太郎は年齢からいえば大学生に当たり、松陰に学んでいた佐々木の「通鑑」、徳民の「左伝」及び栄太郎の「晋語」は国語の一部であるから、この三人の勉学内容は国司の場合と同じく、明倫館における春秋二回の試験対策であつたといふことができる。

右の時期は安政三年初めから安政四年の二月までの状況であるが、安政五年三月二十五日の一文に「ことし三月、学館読を試む。松下塾

童場に赴く者凡そ十五名。皆甲科に登る。一の差跌あるなし」(四三)とある。すなはち幽室時代と松下村塾との差はあるにしても、明倫館の春秋二回の試験が勉強対象の一つであったことも明らかである。

玉木彦介は十六歳で、大学生の年齢に当る。従って文章範範や陳竜川文、蒙求、方正学文、外史、山陽詩鈔などを学んでいるのは、明倫館の試験に何らかの関わりがあったのかも知れないが、これらが大学生としての教育内容と松陰は考えていたのであろう。また武教全書・武教小学などを教えているところからみると、これらは山鹿素行の著書であるから、山鹿流兵学も教え始めていたとみることができる。坤輿図識は世界地理の書物であり、経済要録は経済に関する書物であるから、大学生の策問の事務すなはち時務の学習と考えることも出来る。時務は松下村塾での上級者にとって重要な教育内容になることは後述するが、この頃からそうした意図が出て来ているのではないかと考えることができる。

(二) 作文評による教育実践

幽室での教育実践は前項で見たように安政三年から安政四年の二月までは対読・会読と講義であった。しかしこの間に直接幽室には来ていないが、作文の添削指導を乞うたものがあつた。作文の添削指導には後述に見られるように、作文技術を超えて思想及び行動にまで立入って指導が行われた。これは松陰の教育実践として重要な意味をもつのであるが、これまた彼自身の青年期の作文とその研究が大きな背景になっている。この点を説明しようと思う。

弘化二年即ち十六歳から嘉永四年の二十二歳頃までの詩文は「未忍焚稿」(一四以下)「未焚稿」(一五以下)にある。これらを批評しているのは山田宇右衛門即ち治心気斎、香川甫田、平田新右衛門である。治心気斎は家学の師であり、平田は明倫館の教師を引退し塾で教えていた。彼は明倫館及び藩の主流である朱子学と異なり、徂徠学の人で

ある。香川は同門の兵学者であつた。香川は兵学批評や文章批判を行った様子はない。平田に対しても「与平田先生書」(一六、一七歳)として「玉斧」を求めているが批評したものがない。松陰の所論に批評を加えているのは山田治心気斎である。

弘化四年松陰十八歳の時の文は七篇ある。その内「攀賊船説」(一八)「槍鉞説」(一九)「甲冑論」(二〇)「長槍論」(二一)は兵学にかかわるものであり、「日食論」(二二)「寡欲論」(二三)、「平内府論」(二四)は当時の考え方を示すものである。

「攀賊船説」の骨子は、賊船(当時の外国船の意味)は高くかつ大で、当方は小さい。従って当方の勢力を斉一にして、先方の不意をついて勝を制する以外に道はない。こちらの勢力を斉一に組織化して夜襲を行うべきであるという。これに対して治心気斎は先方も夜襲を恐れて夜は沖に去るに違いないから、よく偵察することが必要だとし、松陰の説に賛成している。そしてこうした論を立てるのは国家の憂に先立って憂うるの意に当るとして、この論の価値をみとめている。

「長槍論」では孫子の「善く戦ふものはこれを勢に求めて人にもとめず」とあることを根據に、よい隊長を選んで長槍隊を使えば勢を作り出すことが出来ると論じている。これに対して治心気斎は勢に求めるのは我にあるから、人に求めずして行えばさらによいのではないかと反論している。

「槍鉞説」では「槍把の用は一人の敵を主とせず衆人を撥ちくを主とす。喉咽を刺すを主とせずして胷肢を撃つを主とす」とみて、隊伍を組んで槍把を利用することを論じている。これに対して治心気斎は「先生の識は高し、能く妙処を論ず、惜しいかな、親しくこれを学習せず、故に論末に至れば則ち人を服せしむる能はず」と。即ち松陰の頭だけの議論に対して痛棒を与えたのである。

「甲冑論」ではロシアやトルコの戦図をみると甲冑を着ていない。銃砲戦で接近戦をやらないのであれば甲冑はやめて身軽にすべきだし、接近戦をやるのであれば、身軽には出来ないというだけで結論は出ていない。治心気斎は戦う者の心理から見えて一概に廃止は出来ない、要は戦の時宜によるといっているのみである。これらの点から西洋兵学や銃砲の実際を知らねばという関心は動いていない。また「その時勢を察し 兵学的知識を事実の上に活かしていこうとする識見や態度において」(一三六)叔父玉木文之進や兵学の後見の林真人よりすぐれた山田であったが、この点への指摘は行われてはいない。

「日食論」の論旨は朱子が王者が徳を修めて政治を行い賢を用いて奸を去るような社会であれば、たとい日食があっても「月は常に日を避」けるし、そういう政治がなければ、日食が非常の変に受けとられるといったのに対して、これは正しいし、立派な政治の下では百姓の心は動揺しないから、日食がないのと同じだと論じている。これに対して治心気斎の批評がない。徳川吉宗が西川如見に天文暦学の講義をきいたのは百年も前のことであるから、日食についての科学的な見方の片鱗が兵学の師として立つ松陰に見えてもよからうと思うが、当時の松陰にはその知識がなかったのではあるまいか。前論と同じく松陰の生きざまに関わることであり乍ら、治心気斎はその指摘を行なっていないことになる。

「寡欲論」、松陰は孟子、周子の語をあげて学者(この場合これから勉学をしようとする者の意)は欲を寡くなくして心を養うべきだし、特に詩文書画などを玩好すべきでないと論じている。そしてそのあとに松陰の志を次のようにのべている。「吾の自らおるところは学者を以つてすべし。いわゆる学とは読書作詩の謂に非ず、身の職を尽して世用に供するのみ、又武士を以つてすべし。いわゆる武とは龜暴の謂に非ず、君に事へて生をおもわざるのみ」と。松陰の人生観・生

きざまをのべているのに対して、治心気斎は批評をしていない。

「平内府論」これは全文約一二〇〇字の漢文のもので、要は重盛の清盛への行動について論じている。「生きては則ちその辞を尽し、死しては即ちその心を尽す。然して清盛の俊^{あち}ためざるは天なり。亦何ぞ重盛をとがむることを得んや」といい、「則ち重盛の忠孝は亦何ぞ疑をいれんや」と納めている。筋は史論ではなく、清盛に対する重盛の事蹟を現在及び将来の鑑みととらえている。重盛の誠心誠意の行動を強調している。これは松陰の記録によると明倫館の秋試に提出して丙科に合格したものという。丙科の位置づけを明らかにすることを得ないが、恐らく治心気斎にも、この前後に批評を求めていると考えられるが、その評言は見当らない。

十九歳の正月から松陰は独立の師家になったのであるが、この年の次の四つの文に治心気斎の評がある。「戦法論議」(一三三)は先の「攀賊船説」の戦法を超えるものはない。治心気斎の評も同じである。

「書瓊杵田津話後」(一三三)「書粵東義勇檄文後」(一三三)の二編は清国が西洋の侵略にあっていることの和蘭人の手記をみての松陰の論述である。前者では「吾邦は自ら持むべきものありて存す、封建の侯伯なり、世祿の将士なり」「その持むべきに因りて朝夕淬励すればこれに加ふるものなし」と論ずるのに対して治心気斎は「外国の状況を審らかにせざるべからず」と評するだけである。後者では「今の夷のたのむ所は船堅にして砲の便なることのみ。船と砲とは器械なり。器械を持めば則ち生をねがふこと知るべきなり。義勇を号せば必死たるや知るべきなり、必死をもつて生をねがふに敵すれば勝たざるなし」という。治心気斎は数百里先の遠い外国のことをよく知り、粵東の人々を忠臣として称賛していることをほめている。しかし文を文として評しているにすぎない。

「長篠戦論」(一三六)織田・徳川の連合軍は武田方の甲騎戦を知って

壕や柵を作り、銃火を浴びせて大勝した。武田方は連合軍のこと知らずして戦い大敗した。「知者は常に勝ち、愚者は常に敗る」と論じている。これに対して治心気斎は「勝頼をして信玄の法を守り、横撃の理を悟らしむれば則ち勝敗未だ知るべからざるなり」と評している。松陰は常勝の原理をのべているのに、治心気斎は不要の仮定をもって評している。

以上の作文を見てわかるように、松陰は生きざまを探求するという態度で文を作っている。治心気斎は兵学論から出ていない。しかも西洋事情や西洋兵学には無知であったと見られる。松陰は彼を師として立てているけれども不満があったに違いない。後の嘉永四年の東北遊で亡命の罪を負うて帰国した松陰に対して、「他日の大功驗を得むことを樂しめるに今は則ち勿々として帰来す。足下の志確ならず、大ならざるをいかんともするなし」と責めたのに対して、「則ち今先生の絶を受くとも少しも懼れざるなり」(二書)といったのは松陰の作文の真のねらいに治心気斎が若い日に正しく対応していなかったからではあるまいか。

幽室時代になって幽室に來ないで作文指導を乞うた者がいる。その中の久坂玄瑞・斎藤栄蔵の二人の場合について、松陰の指導状況を明らかにしてみよう。これらについても松陰研究の成書にふれたものは見当らない。

斎藤栄蔵が松陰の添削を受けたものは全集の四巻だけで十七篇あるが、松陰の評文のあるのは五篇である。そのうち三篇をとりあげてみよう。

(ア) (呈松陰先生)(四六六) 安政二年二月廿八日作、栄蔵二十一歳。

斎藤は嘉永三年兵学入門し(九七五) 嘉永六年に江戸の鳥山家塾で松陰に会っている。東北亡命、下田入海、つづく帰藩後の事も知っており、一度会いたいと思いつつ実現していない。今自分の考えを述べ

るので批評してくれという。栄蔵の考える所では今迄明倫館の名は天下に知られているのに、ここから天下に名を顕わすような人物の出ていないのはなぜか。「抑も勉強の未だ至らざるか」と。これに対して欄外に松陰は批評している。

「子彦(栄蔵の字)誠にここを憂ふるあらば正亮(中谷)の所謂有士の志は誣をなさずと。他日の成功俟つべきなり。願くは以て楮墨の空文となすなければ幸甚なり。孟子謂はずや君子は性と謂はず命と謂はずと。故に余は断じて曰く、勉強の至らざるのみ」と(四六六)

さらに末尾に総評している。

「多く読み多作多思するときは自ら長進あるべし。一字一句の増削は絶えて吾兄に益なかるべし」「余子彦の面貌を識るや久し。又曾てその成童の時、才氣群倫に卓出するを聞く。然れども未だ曾てともに心を論ぜず。今この書を読む。才あり氣あり又志あり。真に余の意中の人なり。然れども才ある者能く氣と志とを裝飾する者これあり。要はその躬行につきてこれを論ずべきのみ」(四六六)と。

明倫館から有名人は出ていないが、才氣志のある斎藤こそ勉強して明倫館の名をあらわすようにすべきで、その人として斎藤を期待する。しかし才に先走る者は氣と志を裝飾しやすい、躬行こそ大事だといっている。

(イ) 加藤清正論(四六四)

斎藤の論旨は秀吉が無名の軍を起して無罪の国を討った。この時清正は袖手傍観して一言も諫めなかった。これでは清正を忠だといえないという。これに対して「このところ作者は素より実見なし、而して偽装仮説以て人目を眩わす、却つてその短を見る」(四六四欄外)と仮説を立ててはいけないうこと及び史的事実をあげて、無名の師、無罪の国というとりあげ方に反駁し、最後に斎藤の論が浮ついているとしている。「且つ今日天下の勢、いかなる時ぞや、西夷称するところの亜細

重なるものは半ば欧墨(米)の呑食する所となる。しかも尚憂を知らず、まさに宴安これ耽り、太閤の拳を以て咎となす、その神聖の道に合するを知らざるなり」(三三三)と。斎藤の論は歴史論であり、しかも私見仮説を加えているところを反駁している。

(ウ) 天下は一人の天下に非ざるの説(四六六)

(エ) 送山県世衡之崎陽序(四六七)

右の二編を併せ総括して次のように述べている。「文は真を貴び実を貴ぶ。仮設偽飾すでにその為人を害し、またその文を害す、この稿についてこれを言へば二論これ課責を塞ぐの作なり。ここを以てその論の謬戾かくの如し。「送世衡」は稍々その真を見る。而してその実を見ず、書読中自ら述ぶる處、正にこれ真実文なり。文かくの如くして始めて読むべし。その蕪詞累句深く惜しむに足らず。願くはここに從ひて益々真実の工夫を下し、痛く仮偽の習を絶て。則ち文と人と並らび進まん。且つ望むらくは読む所の書に就き自ら得る所あり發明する所あらば則ち隨ひてこれを筆にす。或は話題となし、題跋となして常にこれを机上におき、且つ補ひ且つ削る。積むに年才をもつてする。亦一に力を得るの術なり」(四六六)と。斎藤の文には仮設偽飾がある。それがあつては為人を害するばかりでなく、その文自体にも害がある。この仮偽の習性を絶つべしというのである。文章には人間としての真実が出なくてはいけないと指摘している。この立場から(ウ)の論をさらにきびしく批評する。斎藤は書経の「天^ノ視^シ自^ニ我^ニ民^ニ」(天^ノ視^シ自^ニ我^ニ民^ニ、天^ノ聰^ニ從^ニ我^ニ民^ニ「聰」の立場から「民は天なり、天下は天民の天下なり、一人の私有に非るなり」と論じ、堯舜といえども天下を私有してこれを他人に与えることも伝えることもできないと断ずるのに対して松陰は「天下は一人の天下に非ずとは是れ支那人の語なり。支那は則ち然り、神州にありては断々として然らざるものあり、謹みて按ずるにわが大八州は皇祖の肇むる所にして、万世子孫に伝へ天壤と共に窮りな

し。他人の覬覦すべきものに非ず、その一人の天下たる亦明らかなり(中略)本邦の帝室にして或は桀紂の虐あらんも億兆の民は唯、首領を並列して闕に伏し号泣して仰いで天子の感悟を祈るべきのみ。不幸天子震怒し尽く億兆を誅し四海余民復た子遺あるなし。而して神州亡ぶ。若しなほ一民の存するあらば又闕に詣りて死す。是神州の民なり」(三三三)と。この一文は安政三年五月二十三日のもので、「士規七則」(安2・正)「七生説」(安3・4・15)につづくものであるから、この松陰の神州覬に斎藤の到底の思ひ及ぶものではなかった。しかし松陰評の文の勢の上げしさはわかったと考えられる。斎藤も反評している。「さきに正を請ひし所の清正論、天下非一人之天下説、先生曰く、其論は謬戾、これ徒に課責を塞ぐの作なりと。夫れ小文の拙陋は則ち固り有り、然れども議論の如きは則ち其事を察し、其心を考へ、平心易気、これを聖人の典に正し、而る後にこれを決す」(四六六)と前置きし秀吉の史実には間違っているとは思わないが、時勢に通じない論をしたことは過ちであると認めた上で、「天下非一人之天下」としたのは、天下は位の謂ではなく土地人民を謂ったので、位でいえば、たしかに一人の位である。従つて松陰の「一人の天下といふは蓋し位の謂に非ざるや」と。これに対して松陰は斎藤のあげた史実の取扱について、五点にわたつて批評している。これに更に斎藤は反論している。「風聞するに先生、榮(斎藤)をして教ふべからざるの人となすと。榮固より先生の此言を取るを知らざるに非ず。然れども榮は先に入りて師となし、一旦豁然の悟を得ず。自ら謂らく、悟らずして問ふ、書は万言と雖もその惑、いよいよ甚し。その悟るを待ちてこれを叩くにしかずと。爾後太華先生に謁し、その議論を聞く。且つ講孟割記評語を觀、その疑いよいよ甚し」(四六六)と。当時講孟割記の評を太華に求め、松陰の思想と真向に対立していた。従つて太華によりどころを求めようとする斎藤と松陰との間には合わないものがあつた。右

の文を総括して松陰はいう。「眼を開いて神代両巻を読みてみたまへ。吾々の先祖は誰が生んだものか、辱くも二尊に生で貰て、日神に教へ且つ治めて貰て、天壤と窮りなきものが、俄かに君父に負く事勿体なくはないか。もはや是きり申さざるなり」(四六五)と。斎藤はこゝに「吉田(中略)、安政4・3」で、明倫館生の中で勉強のできる者が二人いるとし、その中の一人に斎藤をあげている。(四四七)このあとも「読護法小品」(四六六)「与益成熊治郎書」(四六六)「題楠公碑陰」(四六五)などの評を求めているのに対して、「結語一読し、佳と称し復びこれを見る。亦その習気を嫌ふなり」(四六五)と。松陰は作文の技巧ではなくて文を作る人間性、考え方にふれ、実践を背景にして文を評している。斎藤栄蔵の才気は見抜いてはいたが、その為人に誠心誠意の欠けるところがあると見ていたのである。評言の中に斎藤に好意をもっていと感じられる語句が再三出てくる。斎藤もそれを感じてはいたらしい。それが将来の二人にいかに関わったかは明らかではないが、少くとも安政四年十二月頃には村塾で松陰と対読している(三四七)ので村塾には時折来ていたのではあろうが、安政五年六年の松陰の最も精神の昂揚した時期には一度も斎藤の名が出て来ない。それはなぜであらうか。斎藤は後、長府藩の世子毛利元敏の近侍となり、慶応元年十一月には宗家の尊攘事蹟編輯局に入り、明治には島根県令にもなっている。安政五年頃江戸に遊学してもいる。しかし松陰の文献に出て来ない。明治十六年には辞職し萩に帰り晩年には松下村塾の保存会にも関係している(二二五)が、その生涯に何か燃えあがるものを見出せない。こんなところを松陰は作文を通してきびしく指導しようとしたのではあるまいか。

久坂玄瑞の詩文は松陰全集に十二編出ている。安政三年五・六月頃に久坂は肥後に遊学した。この時宮部鼎蔵(東北七命のとき一緒に行った人)に会い、松陰

の存在を初めて知った。これをして松陰へ入門を願った一文「奉呈義卿吉田君案下」(四六六)が最初のものであるが、松陰の評はない。次に「江月斎詩」(四六六)として二十三の詩をあげている。安政三年四年の二年にわたるもので、これには詩の技法に関連して意見をのべている。松陰の久坂への評として次の三つの作文をとりあげることにする。

(オ) 評久坂生文(三三三) 安政三年六月二日

(カ) 復久坂玄瑞書(三三三) 安政三年七月十八日

(キ) 再復玄瑞書(三四三) 安政三年七月二十五日

この三篇の元になる玄瑞の文は見当ない。松陰の文から推測はできるけれども、その上で指導面を見るより仕方がない。玄瑞の文に対していう。

「議論浮泛にして思慮粗浅、至誠中よりするの言に非ず、世の慷慨を装ひ気節を扮いて以て名利を要むる者と何ぞ異ならむ。僕深くこの種の文を惡み最もこの性の人を惡む。僕請ふ粗(はぼ)これを言はむ。兄幸に精思せよ。凡そ国勢を論ずる者、上は則ち神功、下は則ち豊公にして可なり。時宗は季世に生れ、急変を虞(はか)りて一著偶々中る。固より一時の傑なり。然れども以て国勢を論ずるに足らず。使を斬るの挙、これを癸丑(嘉永六年)に施すは則ち可なり。これを甲寅(安政元年)に施すは則ち晚し、しかれども尚ほ及ぶべし。乙卯(安政二年)を過ぎて今日に至りては則ち晩きの又晩きなり。大抵事機の去来するは影の如く響の如し、往昔の死例を執りて以て今日の活変を制せんと欲する、難きかな。謂ふ所の思慮の粗浅とは是なり」と。つづけて議論の浮泛を衝いている。「天下存すべからざるの地なく、存すべからざるの身なし。ただ事を論ずるには当におのれの地、己の身より見を起すべし。乃ち着実となす。故に身將軍の地に居れば当に將軍より起すべし。身大名の地に居らば当に大名より起すべし。百姓は百姓より起し、乞食は乞食より起

す。あに地を離れ身を離れて之を論ぜんや。今吾兄は医者なり、当に医者より起すべし。寅二は囚徒なり、当に囚徒より起すべし。必ずや利害心に絶ち、死生念に忘れ、国のみ君のみ父のみ、家と身とを忘れ然る後家族これに化し、朋友之に化し、郷黨これに化し、上は君に孚とせられ下は民に信ぜらる。ここに於てか將軍存すべきなり、大名存すべきなり。百姓乞食も存すべきなり。乃ち医者囚徒に至るまで存すべからざる者あるなし。是をこれ論ぜずして傲然天下の大計を以て言と為すこと口焦げ唇爛るとも吾その裨益あるを知らざるなり。謂ふ所の議論の浮泛とは是なり。(中略)聖賢の貴ぶ所は議論にあらずして事業にあり。多言を費すことなく積誠これを蓄へよ」(三三)と。松陰の真意は最後の一語にあるのであって、議論のための議論よりも、誠心を積むことが先だという。現代風にいえば、われ何をすべきかを問うそれに応えるものでなければならぬというのである。

これに対して玄瑞は直ちに反論したらしいが、その原文は残っていない。松陰はこれに対してすぐ反評をせず、玄瑞の思慮の熟するのを一カ月余り待っている。それが(四)の文である。

時宗のやった事を今やろうとするのは「時勢を察せず 事機を審らかにせざる」事である。今はすでに米露の二国とも和親している。これを我から絶つては国際信義を失う結果になる。だが一步譲って虜使を斬るということになってもそれは「幕府の任なり、諸候の事なり」それを吾々がいうことは「辞を修め誠を立つるとは問あり」(五)結局「空論虚譚」だと批評し、次のようにいう。「足下は一医生なり。而して天下の大計を言ふ。以てその常倫に非ざるを觀るに足る。僕は引いてこれを道に進めんと欲し前次反復することかくのごとし。足下察せずしてにわかに以て樽俎を越ゆるを咎むるとなす。わけて僕の足下に望むものありて、正にその能く越ゆることあるを知らずして足下は乃ち敢えて越えず、徒坐してこれを言ふのみ。是れ僕の大いに惜しむ所な

り。足下の書、滔々千言、亦弁ず。一事として躬行に出づるなし。一語の空言に非ざるなし。而してその自ら謂ひて曰く、憤激の余りこれを心に発してこれを紙に書すと。」(三六)松陰は玄瑞の発言が誠心から出、かつ躬行実践という立場からの論を求めているのである。つづけていう。「今一たび足下の為に其胸をひらき其心を広くしてその空言の病を去り、これを躬行の域に帰せしめんと欲す。(中略)心を天地に立て命を生民に立て、往聖を繼いで万世を開く、足下誠によく力をここに用ひ 食息坐臥語默動靜、造次も是に於てし、顛沛も是に於てせば、亦躬行の軽んずべからず、空言のやすくすべからざるを知るあらん。」(三七)と。しかし玄瑞は服しなかった。いや玄瑞は松陰の意図がよく理解できなかったようである。再び反論した。この原文も見当らない。これに対して松陰は三度反評し、ここでは突き離している。

「三たび書を辱うし、捧読一番、僕の従前の疑は渙然として氷釋せり。足下の所謂虜使を斬ることを夷書を以て案となすは真に誠に名あり。これ泛言に非ざるなり、僕さきの思未だここに至らず、足下を以て空虚装扮の徒となせしは僕の過なり。願くは足下決然として自ら断じ今より手を下して虜使を斬るを以て務となせ。僕は足下の才略を傍觀せん(中略)癸丑、甲寅の交、僕微力を以て膺懲を謀り、才なく略なく百事互解す。是に於てか入海の拳決せり。すでにして風浪舟を誤り縲紲身におよぶ。乃ち旧見を洗ひ更に新策をめぐらし心を聖賢の道に潜め、思を治乱の源に致す。大略前二書に陳べし所の如し。而して足下は敢えて然りとなさず、是自ら其才略以て其事を成すに足ると恃むのみ。誠に僕輩の及ぶ所に非ず。(中略)足下誠によくその言に酬いならば、実に天下万世宗社蒼赤の福なり。(中略)然りと雖も其言酬いざらしめば僕輩と何ぞ扱ばん。僕將に足下の空虚装扮を責めんとす。足下尚ほ僕に向ひて之を反詰するや否や」(三八)

松陰は(六)の文評を送ったあと、友人の土屋肅海に「坂生(久坂)志氣

凡ならず、何とぞ大成致せしかしと存じ、力をきわめて弁駁致し候間、是にて一激して大挙来寇の勢あらば僕が本望これに過ぎず」(平亮)と手紙を送った。松陰の激しい評言の意図もわかる。そして玄瑞の反評は松陰の期待した通りだったが、果して玄瑞は松陰の言った誠心を積み、躬行の論を行えといった真意は理解できたであろうか。松陰も亦玄瑞に理解せしめ得たかどうか。これより一年後の安政四年十一月に、久坂はまた四つの史論を書いて評を求めている。それに対して次のように評している。

「高文四道、立言惜辞、要するに吾輩の及ぶ所にあらず。ただ吾は史論を好まず(中略)三篇、彼方挙業習気を帶ぶ。忽ち其一篇を読みて適々これを覽る。朗々口に上せ、連読するに及んで則ち倦む。よくその習気を脱する者は与三南氏一書のみ。此書行文特に粗し。格調別に出づ。乃ち愛すべきなり。然れども文は真心誠意にある。もし専らこれ格調に求むるならば、則ちまた末なり」(四六)と。ここで評した真意もまた誠心誠意をもって躬行にもとづく文でなくてはとっている。松陰は史論を好まないし、玄瑞は史論が得意であったのかも知れない。しかし一年後に同じ指摘を玄瑞はうけている。これから先の一步については玄瑞の眼がいつ開けたかはわからない。松陰も手を貸しているようではない。本人が気づくべきだとまでも述べていない。だが以上のような指導を顧みると、松陰自身が青年期に治心気斎にうけた添削や批評は当時としてはきびしいものであったかも知れないが、松陰の方からみれば意に満たなかったであろうことは推測できるし、それを経験として、斎藤や玄瑞らへの作文指導が行われたと推測することもあながち誤りとはいえないであろう。

(三) 続・講孟余話

安政二年十二月十五日出獄し、杉家に帰ったが、戸庭からも出でず、故旧をひかず、一室に読書するという決意があった。父兄はこれ

を惜しみ獄中で著した講孟割記(後に余話と改めた)が完結していないことを考え、その完結のために孟子の講義を聴くことにした。外叔久保も同席した。すなはち出獄の翌々日の十七日の夜のことである。(三六)

前項や前々項でのべた教育実践とは異って、講義をきく人々は父兄や近親者である。嘗つての獄中とは対象者が違っている。講義態度も余話の立場も微妙に違ったに違いない。やがては青少年も加わる。自然に異るともいえようし、開講後六カ月目に松陰はいう。

「それ人情自国を恋ふる事ここに至る者他なし。君あり親あり墳墓あり室家あるを以てなり。苟も思をここに致さば忠臣二君に仕へざるの理自ら明にして、防長の臣民は防長に死生すべく、皇国の臣民は皇国に死すべきの義に至りては何ぞ疑を容れん。これ余講孟割記を作るの第一義なり。故に開巻に於てすでにこれを論ず。合せ考ふべし」(四四、安3・6・7)

「抑割記の開巻第一義は国体人倫にあり、故に首として君臣の大義を論ず。結末に於てみだりに此道を以て自ら任とするの意を著す。同志の諸君子始末を合考して余が志の孔孟に謬るや否や、国体人倫に戻るや否やを論究し、教を賜ふを惜しむことなくば幸甚幸甚」(四六、安3・6・13)

これらの言から講孟余話では士規七則で規定した日本人と防長武士の形成という点では同じことを述べているが、講話余話か直ちに松陰の教育思想を述べているとはいえない。多くの松陰に関する成書で講孟余話はとりあげられてはいるが、彼の教育実践とのかかわりに於て、出獄以後の講孟余話の所説がとりあげられているものは少い。この点について検討をしようと思う。

先に第一項で見たように、幽室での学習に五月には高須滝之允(三歳)、佐々木梅三郎(七歳)、玉木彦介(六歳)らが加っていた。

「吾甲寅（安政元）以来身を閑するに木を以てし、体を縛するに索を以てす（中略）今日禁錮やや紆ふといふとも足門徑を出でず、親近の外敢て他人に接せず、亦窮と云ふべし、然れども其志に至っては松本一邑に一二の奇傑を生じ、以て忠孝の首、天下の唱とならむ事を欲す」（三四三、安3・5・17）と。またいふ「当今天下の士風頗る衰ふ、松本小邑といふとも、諸君能く心をあはせ、断然として古武士の風を以て自ら任じ、以て天下の先とならば、亦豪傑といふべし」（三四三、同右）と。これは席にいる親戚の子たちへの期待であると同時に松本村にいる若者たちへの期待である。后者の引用文の前では中国の陳渉、項羽、劉邦及び日本の時宗、秀吉、西洋ではマジェラン、コロンブス、ナポレオンの名をあげてそれぞれの人々に関係する歴史上の事実から、彼らが豪傑であると解説し、さらにまた徂徠、仁斎、素行も、毛利藩の横地、内藤らもまたある事実から豪傑だと説明し、こうした豪傑に比敵する人物に「諸君」はなれるのだと励ましている。これから数日してまたいう。「人如何にせば大丈夫となり、英雄となる事を得んか。他なし、伊尹の志を以て志とし、顔淵の学を以て学とするときは其他の富貴貧賤自ら軽くして何ぞ能く吾を淫移せんや」（三四六、安3・5・23）と。このような松陰の期待にこたえて青年が起つならば、「今諸君と松本村の風化を起さんと欲す」（三四七、安3・6・10）の意図は実現されるわけである。伊尹の志とは天下を以て任とすることであり、顔淵の学とは修己で示される。伊尹の志、顔淵の学を具体的に進める方法はすでに士規七則に示してをり、その第六則にいう成徳達材である。その内容を明らかにして次のようにいう。

「徳とは忠孝信義皆是なり。材とは治民理財軍務等に長ずるの類皆是なり。（中略）徳ありて材なき者あり、材ありて徳なき者あり、材なき徳なきといふは某材某徳と指していふべきなきをいふ。愚鈍無材狂悖失徳の人をいはず（中略）治民の職は治民の材あり、理財の職は理

材の材あり、軍務の職は軍務の材なり（中略）賢者は即ち有徳の人なり、能者は即ち有材の人なり、而して徳材を兼ね教ふる者は君子なり。（中略）君子を以て是を教ふる時は徳は実徳となり（中略）材は実材となる」（三四四、安3・5・29）松陰は前編で引用した文のように、若い頃には才の価値については必ずしも認めていたとはいえない。自己形成においては才即ち材を表面に立てることは立志を妨げるものとして避けてきたが、教える側に立つときは、実徳実材を切り離すことはできない。成徳の成も、達材の達もともに実であり、正しく実用に立つことである。このためには士規七則の第七則で「死して後已む」という努力が必要であるといった。ここでも次のようにいつている。

「凡そ学問の道は死して後已む。もし未だ死せずして半途にして先廃すれば前功皆棄つるものなり。学といふは進まざれば必ず退く。故に日に進み月にすすみ、遂に死するとも悔ゆることなくして始めて学といふべし（中略）学を講ずるは道を得るがためなり」（三四五、安3・5・23）然らば道とは何かが解説されねばならない。松陰はこの前年安政二年正月獄中から兄梅太郎への手紙の中で「道は見得て分明、践み得て真切ならんことを要す。分明と真切とは経書を読む読まざるにあらず、平生の工夫覚悟にあり。死生の途に於て分毫も惑ふ所なくんばその大略を得たり。寅ここに於ては見得て敢えて古人に恥はづす」（五三六）と。これは松陰の自覚の言であって、他人には解説が必要である。

「道の大本を云はば、人と生れては人たる所を知り、五倫を明らかにし皇国に居ては皇国の体を知り、本藩に仕へては本藩の体を知り、以て根基を建て、さてその上にて人人各々其職掌を治むべし。儒官は経史を博覧精究し、天文家は天文、地理家は地理、医家は医術、画家は画法、又弓馬刀槍銃砲、各々技芸を以て専攻の家業とする者は更にその精妙を究め、其他士は士、農は農、工は工、商は商、皆其職掌を治むるなり。かくの如く大小綱目井然画定する上は、西洋究理学の如き

も自ら世に廃すべきに非ず」(三十四、安3・5・29)と。松陰の考えた道とは分明真切なものである。しかし聴講の青年たちにはよくわかったようでもなかったとみてか、さらに次のようにのべている。一週間後のことである。「故に仁義礼信は即ち親義別序信なり。余因て君臣夫婦長幼朋友の五倫と仁義礼信の四徳とを経緯とし、智を以て是を織り合せ名けて道とす。是を外にしては道なし。故に徳とはこの道を以て心に得ることなり。業とはこの道を行ひて成功ある事なり。誠とはこの道を専一真実に行て息まざる事なり。敬とはこの道を奉持慎重して捨てざる事なり。善とはこの道に善なる事なり。才とはこの道に才なるなり。聖賢千言万語、豈復古この外あらんや。実心実行なき者は道を以て多端となす。余則ち一条の大路となす」(三十五)と。実心実行の面からすれば道は唯一つである。もちろんそのためには死して後已むの努力が必要である。

講孟余話の中で出獄後に見える教育観として重要な面がもう一つある。

「才の字、前の第六章(管子上)第七章の才と皆同義にして才能才芸の才に非ず、説文に才を説いて曰く、草木の初なりと。(中略)蓋し所謂才とは即ち性にしてその発見(見)せんとする所についていふ。草木の初て枝葉を生ぜんとするが如し。故に性の発して情とならんとする所を指していふなり」(三六、安3・3・23)と。才は才能の才にも使すが、孟子の説く才は人間の本性のまさに発現せんとする根源とみている。それは私欲を消尽したところに発する純金と松陰は見た。今日の的にいえば個性に当るであろう。勿論松陰は個性ということばを使っていないし、そこまで分析していたとは考えられないが、このことを頭において読むとよく理解できるものがある。「王陽明の説に聖とは私欲消尽して天理純全なるの名なり。量目の軽重に非ず、故に聖は純金の如し、其輕重に至ては聖たる所以に非るなり。故に聖人中に在り

て自ら輕重あり。堯舜孔子の如きは百兩金なるべし。文王周公は七八十兩、湯武は五六十兩などと各々輕重の差はあれど、純金たる事は同じ。今吾輩といえども私欲を消尽し天理純全ならば亦自ら一兩や二兩の純金はあるべし。然れども後世の学者力をここに用ひず、徒らに才力智力を尚ぶは銅鉄を混じて金の量目を重くせんとするが如し」(三六、安3・4・3)又云ふ。「心を尽すは心の一杯を尽すなり。形を踐むは形の持前を使ふ事なり。形は耳目口鼻四体皆形なり。耳は善惡を聞き分くるが持前なり。目は善惡を視分くるが持前なり。口鼻四体皆各々持前あり。この持前を使はざるは凡夫の常なり。もし皆是を使はば即ち聖人なり。」(三六、安3・5・26)すなはち前者では私欲消尽してあらわれる金の質、いはば個性的なるものをいい、後者は人各々の持前としてとしての個性的なるものを指している。かくて個性的な材を実徳に一貫させて実材たらしめる問題が残るわけである。

(四) 教育目的の凝集

安政二年九月十八日(三六歳)に講孟劄記についての評を明倫館の学頭山県太華に乞う一文が書かれた。

「矩方小少より家叔玉韞(正玉文之通)に従ひて業を受く。韞、先生に事へて年あり。是によりて先生の声名を歎む。すでに長じ稍先生に従ひて容儀を拜し、言議を聞くを得たり。愈々益々尊信す。(中略)今や圍牆に拘囚せられ頗る自ら憤悲し、大いに古昔聖賢の心を求め、益々巨儒碩師の風を慕ふ。(中略)伏して惟ふに先生学問文章群儒に傑出し、夙に一国の文柄を握り、大いに旧学の陋習を振ふ。今は老退と雖もその才を愛し道を憂ふるの志、終始一の如し。豈敢えて当初より減ずるあらんや。則ちそれ矩方等に於て固より包含着して遣さざる所あるべし。是を以て敢えて妄りに著す所の講孟劄記なる者を録し、教を求むべからざるの間に求む。まことに先生、僕の積年の志を察し、その狂を咎めず、後知を覚さるれば何の幸かこれにくわへん」(三七)と。

この年太華は七十五才の高令で、而も右手がきかず。左手をもって長文の批評を書いている。これに入る前に、太華の社会的地位を明らかにしよう。

藩学明倫館は享保四年（一七二〇）に創設せられ、初代学頭は小倉尚斎で朱子学者であった。第二代は山県周南で、彼は古文辞学派で徂徠学者でもあった。この人の時代から明倫館の学風は徂徠学になった。これから約七十年後の天保六年に山県太華が学頭となった。これから再び明倫館は朱子学に変った。もともと太華は福岡の亀井道載に学んだ人で、道載は山県周南の門人であるから徂徠学者であった。従って、

太華からの評語		松陰の反評	
全集	時期	全集	時期
第一、講孟劄記評語上（二四九五） 第二、講孟劄記評語草稿（二五二三） 第六、講孟劄記評語下の一（二五二六） 第七、講孟劄記評語下之二（二五二七）	安2・11・15以前カ 安3・5・23頃カ 安3・11・1以前 安3・12・25以前	第四、講孟劄記評語の反評（二五三三） 第五、講孟劄記評語の反評（二五三六） ↑行間に反評 ↑行間に反評 書太華翁講孟劄記評語後（二五二二）	? 安3・9以後カ 安3・11・1以前カ 安3・12・25以前 安3・10・28

右の表の如く太華の評をした時期も松陰の反評の時も明らかではないが、大体が安政三年の後半であり、評語の後にした十月二十八日の一文がこれらの総括であり、松陰の考え方をまとめているものとみてよいであろう。松陰はいう。

「翁廢後半身痿痺し左手をもて字を写す。その点画を諦視するに勃峯欹斜、或は断え、或は続く。（中略）然れどもその立論は悖逆謬戾にして、忌憚あることなし。大意は幕府を崇めて朝廷を抑ふるにあり。朝廷の衰微未だこの時より甚しきものはあらず。而も太華は猶ほ以て未だ足れりとせず、之を罵りこれをそしりただ人の朝廷の徳を思はんことを恐る。是れその志朝廷を滅して幕府を帝とせざれば則ちあかざ

太華も始めは徂徠学を学んでいたのである。太華は徂徠学では落付けず、江戸に出て幕府の儒官林家に入門して朱子学を修めた。そして朱子学者として帰藩し、明倫館の学頭になった人である。徂徠学の弊風が明倫館にも残っているところを除いた人物でもあるし、個人としてもいくつかの著作をもっている。

松陰は右の太華に四回にわけて講孟余話の評をうけている。松陰全集（岩波版）の第二巻の講孟余話の付録としてその断片が出ているが、その時期や順序については明らかではない。しかし他の文献から私は次の表のように整理した。その手続経過については省略する。

るなり。凡そ皇国の皇国たる所以のものは、天子の尊、万古易らざるを以てなり。苟し天子易ふべくんば則ち幕府を帝とすべく諸候も帝とすべく士夫も帝とすべく農商も帝とすべく（中略）則ち皇国と支那印度と何を以て別たんや。吾生来未だ曾て幕府を輕蔑せず而も独りその甚しく朝廷を尊ぶを以て太華の黜斥する所となる。噫、吾れ皇道と国運とのために言を立つ。何ぞ太華の黜斥を避けんや。（中略）太華の論は幕府の美疵なり。吾が言は幕府の薬石なり。（中略）かの諸候は幕府の臣たり天朝の臣にあらずと謂ふがときはこの編を読むもの蓋し切齒せざるはなからん」（三五二）と。これに対して太華はいう。「大内義隆を責亡ばせし人は多くは大内氏の旧臣にて、尼子氏の亡びんとせし

時、その臣来たりて御当家に仕ふる者も多く、織田信長死去の後は其臣多く豊臣氏に仕へ、豊臣氏衰へて又徳川に仕ふの類、戦国の世は君臣の道も亦一概に言ひ難し」(三三三)と。これに対して松陰はさらにはげしく反評をする。「果してこの説の如くば国家他日変難あらば先生去りて他国に事へて心に甘んずるや。余の如きは死すと雖も万々然る能はざるなり。良三(原米)は大内氏の宗臣なり、松如(豊士)は尼子氏の陪臣なり。(中略)余亦織田氏の臣裔なり(中略)先臣来り仕ふる皆非なり。然れども一日臣となり、万劫変らず、先臣の罪を償ふは己と子孫にあり。(中略)余自ら任ずるかくの如し」(三三三)と。太華は歴史的現実だけを見ている。松陰はこれに対して、現実はそうであっても倫理的には問題がある。歴史的現実として一旦君臣関係を結んだ以上はその君臣関係が生れ、その非倫理的な面は後からの実践で償うべきであると松陰はいう。太華の考え方なら今の毛利公の危急に際して自分の都合で捨てかねないのではないか。

太華の君臣観は当時の常道のものであったかも知れないが、松陰は違っていた。太華はいう。日本では天皇もあるし、大將軍もある。大將軍は東都にゐて、諸候の主であり、平和な時は諸候を「朝せしめ」事ある時は諸候に命じて寇賊を征伐させた。「当世異学に惑ひし者は藩国の臣にても普天率土皆王臣なり。わが主君には不忠になりても皇朝へさへ忠義になれば宜しきと申すように心得違いたる者も間々これあり」(三三三)と。これに松陰は反評を加えていう。「わが主に忠ならずして安くんぞ皇朝に忠ならんや。皇朝に忠ならずして安くんぞ能くわが主に忠ならんや。皇朝とわが主とを別ちてこれを二とするは習俗の見なり。」(三三三欄外)

この頃の儒学者の思想はほとんどこの太華の思想と大差はなかったであろう。藩校に於ても私塾に於ても、儒教の本来の修身齐家治国平天下の思想に於て教育が行われ、国家有用の人材を養成することにあ

るといっても過言ではあるまい。江戸時代の私塾の中で特色のある陽明学派の中江藤樹の塾則「藤樹規」(註一)に於ても、折衷学派の広瀬淡窓の咸宜園の「塾規」(註二)に於ても、中井甕庵・竹山・履軒の懷徳堂の「定」(註三)に於てもこの本旨はそれではない。すなわち修己治人の学の中で、忠孝の道を中心においていることも同じである。問題は誰に対する忠であるかであって、結局太華流の歴史観と忠論になるのが、当時の一般の考え方であったとみることができよう。松陰はすでに安政二年三月に書いた土規七則でこれを明示していたし、講孟劄記の冒頭にも次のように述べている。

「修身齐家治国平天下は大学の序、決して乱るべきに非ず。(中略)世の君に事ふるを論ずる者謂らく功業立たざれば国家に益なしと。是大いに誤なり。道を明らかにして功を計らず義を正して利を計らずとこそ云へ、君に事へて遇はざるときは諫死するも可なり幽囚するも可なり。饑餓するも可なり(中略、かくすれば)人臣の道を失はず、永く後世の模範となり、必ず其風を觀感して興起する者あり。遂にはその国風一定して賢愚貴賤なべて節義を崇尚する如くなるなり。(中略)然れども此論はれ国体上より出て来る所なり。漢土に在りては君道自ら別なり(中略)我邦は上天朝より下列藩に至る迄千万世世襲して絶えざる事中、漢土などの比すべきに非ず。(中略)我邦の臣は譜第の臣なれば主人と死生休戚を同じうし、死に至ると雖も主を棄て去るべきの道絶えてなし」(三三三、安2・6・13)

すなわち修身齐家治国平天下の教育の中核をなす修己は松陰にとっでは一般論ではなかった。朝廷につらなる忠と孝とでなければならなかった。講孟余話の講義の終った安政三年の六月の段階に於て松陰の教育の中核は具体的な天皇への忠を考える人物の養成にあったといえよう。太華との論争の中でより明確にこれを意識したといえることができる。

註1 近世日本の儒学（徳川公継宗七十年祝賀記念）岩波書店 昭14、一〇四二頁

註2 同右

一〇四四頁

註3 同右

一〇四四頁

二、松下村塾における教育の構想

（一）青年時代の教育思想

松陰が教育に正式にかかわったのは山鹿流兵学師範として独立してからである。藩主毛利敬親は十九歳で藩主となり、二十三歳の時江戸藩邸に有備館を設け、在住の藩士たちの教育に当らせた。三十歳の時（嘉永元年、一八五〇）萩の藩校明倫館の再建に着手した。明倫館は江戸時代の藩校としても古く、享保四年（一七一九）吉宗の時代に創設したものである。村田清風（一七三三～一八五五）を学校手元役として再建に当らせた。城下中央の江向に土地を定め、漢学のみならず医学・洋学・国学なども整備し、兵学武術水練なども学べるように考え、現在の総合大学的な構想であった。家柄身分に関係なく藩士全体が平素に同じ教師同じ課程で兼修し「君を衛りあだを禦ぎて邦家の干城」とする意図であったと山県太華はその再建碑にのべている。再建が完成したのは嘉永二年正月で、その広さも一万五千坪に及び旧館の十五倍にもなったといわれる。

松陰の青年期の教育思想をみうるものとして 次の(7)(i)の藩主への上書と兵学に関する提書の(ウ)及びこれらより二年あとの(オ)の上書とをあげることができる。

(7) 明倫館御再興に付氣附書（一八五三）

これには「嘉永元年戊申十月四日印符にして御再興懸り唐船方三宅忠左衛門へ持参致し候もの」とある。

(i) 兵学寮日割稽古を銘々稽古場に改められ度願書、嘉永二年二月

（一八五五）

(ウ) 等級の次第（一八五〇）嘉永元年十一月

(エ) 兵学寮提書條々（一八五七）嘉永二年二月

(オ) 文武稽古万世不朽の御仕法立氣附書（一八五九）嘉永四年辛亥二月

二十日、支配方迄印符にして差出候控、禁他見

この中で(i)は吉田大次郎・多田藤五郎・大西喜太郎の三名の連名で、銘々の稽古場が欲しいという陳情書で、ここでとりあげるに値しないものである。

(ア)の氣附書は松陰以外の人々も出してをり松陰に特別指名があつて出したものでもない。儒官繁澤豊城・藩士山田七兵衛らの意見書も残っている。松陰はこの一編で賞罰・風俗・規則・諸芸・試法・通論の六項目四十三か条約一万字に余る意見をのべている。十九歳の青年の書いたと思われる充実した内容である。教育思想として特筆すべき事は書かれていないが、「賞罰は拜領物御咎め仰付られ候ばかりにては御座なく候て、一語一黙にこれあるものに御座候」（一八五〇）とか「大禄の者の子弟は怠り勝ちに相成り（中略）出精仕り候者は多く小身困窮の者に御座候」（一八五〇）などの着眼がある。そして

「この度文武御興隆の儀は一技一芸の末にては瑣細の事にて大学校御再建立程の御思召筋にもかなひ難き事に存じ奉候間国家の風儀一変仕候様ござなくては相すまざる事に存じ奉り候（中略）質朴篤実に相移り候処専ら御政教と文武御引立と相兼ね候て行われ申すべきと存じ奉り候」（一八五三）

明倫館の重建を大学校御再建ととらえ、一技一芸の興隆だけではその趣旨にかなわずといひ、「国家の風儀を一変」すべきことととらえているのはよいが、それを質朴篤実に集約していることは、天保の大飢饉のあとの雰囲気としてはやむをえないことだとも考えられるが、それは理念的でありすぎ、藩主や村田らが、そうし時機にもかかわらず、医学・洋学・国学にまで教育内容を拡大しようとした意図からは

離れていたということが出来る。それを推進するために藩主の上覧式・御参堂御見分などの試法によって興隆させること(一五三)だといっているが、特別独創的なものではない。

(五)は山鹿流兵学の教育内容や進級試験の方法をしるして、御再興方に提出(一五七)したものである。初等では素讀になつていて、甲科乙科がある。中等では伝書講釈が中心でこれも乙科甲科の二つがあった。初等の乙科は伝書が中心で、それが終わると甲科に上がり、七書その他の素讀になる。初等の関係書が自在に読めると中等に進む。それには漢文の四〇五か所を即席で素讀し、それに合格しなくてはならない。中等の乙科では武教小学・武教全書の中から侍用武功・撰考などの項の講釈を学び、甲科では伝書を初篇より終篇まで講釈をうける。中等から上等への進級は伝書の全部から四〇五か所を即席で講しその試験に合格する必要がある。この上に上等と最上等がある。これは省くが、この外に「員外」というのがあった。この中に入るのは次の三種の人々である。

「流儀功者にてこれまで免許皆伝等相済候か惣して流儀に於て厚き勤功これあり候部

中年以上にて御役所勤仕官暇の時分罷り出で少壯の者同様に精得仕りえざる候部

壮年を過ぎ候てこの度の御興隆厚き御思召の旨感戴し奉り折に稽古物へまかり出で候へども一々等を追ひて進む様の修行得仕まつらざる候部」

先に見た明倫館の小学生三科三等級、大学生の五科五等級制に比較するとき、最上等をおくのは別に独創とは考えられないが、「員外」をおき、その内容の示し方をみると、現代的にみても注目される。

(六)は藩主の東行について第一回の江戸遊学に出発する直前に書いたものである。明倫館再建への上書から二年あとの嘉永四年のものである。

る。松陰の江戸の刑死後安政六年に、高杉晋作がこれを読み欄外に簡潔な評を記入している。松陰が書いた時から九年経過しているが、同じ時代に生きた高杉の評であるだけに、松陰の考え方の、当時における位置を示すものとして興味深いものである。教育に関係するものにしぼって検討しよう。

「文武御興隆の大本は御家中貴賤を撰ばず剛毅木訥(高杉評、剛毅木訥の四字、士の本なり)の風をなし候段第一義と存し奉り候、さなくてはたとい何程文武に長じ候人材を成就仕り候ても国家において毫も裨益これなく(中略)剛毅木訥の所より鍛鍊致し候へば一己の小武芸も大に人の材徳を長じ候」(一五九)また「就ては上より御制度を立たせられ度く存じ奉り候制度の大略は十五歳より銘々力量に応じ諸武芸稽古仕らせ十九歳までにその志の向ふ所、才の長ずる所をはかり、二芸ずつを定め終身の業として師家師家より明倫館御用所まで附出で仰せつけられるべく存じ奉り候(高杉評、此論大当)(一六〇)」

「その志の向ふ所才の長ずる所をはかり」という表現は文章のあやもあるかも知れないが、前編で見た立志論や才能論からは少し矛盾を感ずるところではある。

「兵学の儀一流一派にかかはり変通これなき様にては実用に叶ひ申さず、第一経術に本づかずしては義兵暴兵の弁も明らかならず、古今の事蹟沿革の次第を知らずしては流儀の伝書も趙括が父書を読み候様の弊に落入り申し候。」(一六二)と。この一条には高杉の批評はない。しかし当時の松陰の教育思想として注目すべき点が出ている。一つは兵学は一流一派にかかわってはならないという点である。松陰自身も山田亦介について長沼流兵学を、飯田猪之助について西洋陣法を、守永弥右衛門から荻野流施術を学んでいる。(年譜下)しかし明倫館の再建には西洋学への開眼が大きい比重をもっていたこと及び西洋兵学への併修については関心を示していない。二つには兵学は経術に本づ

かねばならないという発言である。「明倫館諸生学課目次第」というものをみると、明倫館に学ぶ諸生の分野に経学・歴史・制度・兵学・博学・文章の六科目があり、兵学の部に次のように示されている。

「一、兵学・和漢

周礼大司馬の軍法を本とし、七書に通じ和漢古今兵家の書併せ考ふべきこと

但経学を以て本とすべきこと」(防長回天史)

即ち最後の一行が「経学の部」を除いて他の五科にすべて付けられている。これは明倫館での諸学の基本的態度であったと考えられる。従って松陰の発言はこの基本態度にもとづくものか松陰自身の独自の発想かそれは明らかではない。しかしこの時より更に四年の後、安政二年正月、松陰と兄との手紙の中で、兄梅太郎が松陰に対して「経学に基かぬ学文(問)にては捌け申さず」と明倫館的意見をのべたのに対して、松陰もその論の正しいこともわかるし、従学した象山からも経学にもとづかねば「間違いが出来る」(五三六、六歳)と指摘されたけれども、遂に従わなかったという。勿論この時は歴史と経書との関係ではあったけれども。

以上青年期の教育思想をみてきたが、疑問として残るものは第一に明倫館再建への藩主たちの構想に本当に無理解であったのか、或は作文指導で表明したように松陰の「己の地」からの発言しかなかったのか、第二には山鹿流の専門家としての独自の教育意見がどこにあるのか、員外のような独自の発想はあったにしても、山鹿流らしい特色のある教育論があったかどうか、第三には人間へ着眼しての教育論がちっともあらわれていないことである。

松陰に関する成書の中にも松陰の青年期の教育思想を論じているものは殆ど見当たらない。後述の教育思想と比較するとやはり若いという一語に尽きる。しかし後来の教育思想の伏線になることは当然であっ

て、その意味や価値はこれから探求されるものと信ずる。

(二) 松下村塾記の構想

松下村塾記が書かれたのは安政三年九月四日である。この頃までに山県太華との講孟割記の評を通して論争があり、この年の八月下旬には僧黙霖との有名な論争があった。すでに見て来たように松陰の教育観は士規七則で確立され、太華との論争で教育目的の凝集ができた。こうした背景の上で、日毎膝下に来ていた彦介始め親戚の子弟を前にして、教育の考えをまとめようとしたことも必然の流れであったということが出来る。

松陰に関する成書では必ずといってよいほど松下村塾記はとりあげられている。私も村塾記の中から新しい発見はないけれども、このあとの教育実践を探求する上で必要であるので、全文を引用しよう。

「長門の国たる僻して山陽の西陲にあり。而して萩城は連山の陰を蔽ひ渤海の衝に当る。その地海を背にし山に面し、卑湿隠暗吉見氏の故墟にして、古は甚だしくは頭はれず、二百年來乃ち本藩の治所となる。ここに於てか山産海物四方より輻湊し、巖然たる一都会となれり。城の東郊は則ち吾が松本邑なり。松本の邑たる南に大川を帶ぶ、川の源は溪澗数十里、人能く窮むるなし。蓋し平氏の遺民嘗て隠匿せし所なり、その東北の二山、大いなる者は唐人山となし、朝鮮俘虜の鈞陶する所なり。小なる者は長添山となし、松倉伊賀の廢墟なり。伊賀嘗て大内氏の将岩成豊後と数々陳原に戦ひ、連りに敗るる所となり、遂に大將淵に投じて死す。原と淵と今皆存すといふ。山川の間人戸一千土農あり工商あり昔時の忿惋不平の氣、今は則ち鬱然靄然として発して人物となり煥呼として一勝区をなせり。然れども吾れ常に怪しむ。昔の忿惋不平の氣、流れて川となり峙ちて山となり発しては則ち人物となり以て所謂一勝区を成すは固よりその常のみ。苟も奇傑非常の人を起し奮發震動して乾を転じ坤を憾かし以て邦家の休美を成すに非らざるよりは將た何を以てか山川の氣を一変してその忿惋を平らかにするに足らんや。況んや萩城の隠暗にして頭はれざること、亦已に久しきをや。今は則ち巖然たる一都会たれども是れ猶ほ真に頭はるる者に非ず。特だその機(た)の先兆のみ。今

松本は城の東方にあり、東方を震となす。震は万物の出づる所、又奮発震動の象あり、故に吾謂らく萩城の將に大いに顯はれんとするやそれ必ず松本の邑より始まらんかと。

去年余獄を免され、松本に家居し外人に接せず独り外叔久保先生及び諸従兄弟、時々過訪し因って共に道芸を講究す。家嚴家叔と家兄と又従って之を奨励せらる。吾が族の盛大なる蓋し將に住々一邑を奮発震動せんとするなり。初め家叔先生の徒を集めて教授せらるるやその家塾に扁して松下村塾といふ。家叔すでに官となりその号久しく廃せり。外叔すでにして邑の子弟を会して之を教へ、その号を沿用す。

この頃余に命じて之を記せしむ。余曰く、学は人たる所以を学ぶなり。塾かくるに村名を以てす、誠に一邑の人をして入りては則ち孝悌、出でては則ち忠信ならしめば、則ち村名これに係くるも辱ぢず、もし或は然る能はずんば亦一邑の辱たらざらんや。抑々人の最も重しとする所のものは君臣の義なり、国の最も大なりとする所のものは華夷の弁なり。今天下は何如なる時ぞや。君臣の義講ぜざること六百余年、近時に至りて華夷の弁を合せて又これを失ふ。然り而して天下の人まさに安然として計を得たりと為す。神州の地に生れ、皇室の恩を蒙り内は君臣の義を失ひ外は華夷の弁を遺れば則ち学の学たる所以、人の人たる所以それいづくに在りや。是れ二先生の痛心せらるる所以にして而して余のこれが記をつくらざるを得ざるも亦ここにあり。

噫、外叔先生誠に能く一邑の子弟を教誨して、上は君臣の義・華夷の弁を明らかにし、下は又孝悌忠信を失はず然る後に奇傑非常の人起ちてこれに従ひ、以て山川忿惋の氣を一変し、邦家休美の盛を馴馳せば則ち萩城の真に顯はるること將にここに於てかあらんとす。豈ただに一勝区一都会のみならんや。果して然らば則ち長門は僻して西陲に在りと雖も、その天下を奮発して四夷を震動するも亦量るべからざるのみ。余は罪囚の餘、言ふに足る者なし。然れども幸い族人の末に居れり。その子弟を糾輯して以て二先生の後を継ぐがごとくんば則ち敢へて勉めずんばあらざるなりと。外叔先生曰く、子の言は則ち大なり。吾敢へてせざるなり、請ふ邑人に切なるものを聞かん」と。余曰く、古人月旦の評あり。今しばらく子弟の爲めに三等を設立し、分つて六科となし、冬々その居る所を標し月朔に升降して以てその勤惰を驗せん。曰く進徳、曰く専心、是を上等となす。曰く励

精、曰く修業、是を中等となす。曰く怠惰、曰く放縱、是を下等となす。三等六科、志の趨く所心の安んずる所、なして可ならざるなし、誠に邑人をして皆進みて上等の選たらしめば則ち吾の前言未だ必しもその大を憂へざるなりと。先生曰く善しと。因って併せ記す。安政三年丙辰九月、吉田矩方撰す(二三三)

まず地理的条件を論じその歴史の意味を発見し自らの位置に、ある意味を見出している。文の勢いと地理的歴史的な解釈から松本村に住む若者たちこそ次の時代を背負うような人物になれるし、ならねばならないというはげしい期待感が迫ってくる。松陰のいう文を書く時の誠心誠意のなせるわざか。

松本は松下に通ずる。松本の名をかけた塾である以上松本村の名を辱かしめてはならない。一人一人に重い任務がかけられているぞと使命感を感じさせる。

士規七則の第一則は君臣の義であり、第二則は華夷の弁である。従ってこの原理は士規七則からの展開である。太華との論争でいかにも日本から君臣の義が六百余年間失われたと切実な感じがあったろうし、安政元年三月の米国との和親条約で華夷の弁が忘れられたと松陰は心を痛めていた。而も周囲の人々や当路の人々は安然としている。人の人たる所以も学の学たる所以も見失われたと思い、これを恢復することこそ教育の仕事と見たのである。

村塾記の云う所は村塾教育の理想である。幽室からつづいて来ている者も新に加ったものも村塾教育の理想を理解して加ったというわけではない。現実にはいろいろの段階があった。孟子の素読(四二)から習字や清掃(三三)もあり、そろばんもあった。(三三三) また前述したようにこれより高いレベルの明倫館の春秋二試の準備教育もあった。同じ明倫館の試験でも右よりも低いものもあったらしい。「昨二十三日素読生春試、松下村塾より出て試に就く者十余人」(四四四)、安4・3・22とあるから、こうした受験対策も松陰の頭の中にあったに

違いない。また明倫館における兵学教育は江戸遊学によって中断し、一次二次を通しての江戸の兵学研究も何らの実践もなくて終わっている。松陰の心中では「兵学教授」を実践したかったに違いない。「丙辰日記」では安政三年八月二十二日に武教全書を開講している(三三三)松陰はこれに先立って、七月五日江戸の久保清太郎に素行の著作を古本または写本によって手に入れてくれるように依頼している。(三四〇)これを見ると吉田家の蔵書となっている素行の著作がいかにも少いことに驚かされる。書目のみがあって現書がない(三四〇)という嘆息は、この頃から再び山鹿流兵学をもう少し広い視野から研究を始めようとしていたとも見ることができる。そして「謫居童問」の横に「是等の書に却つて妙はあるべく思はる」また「中朝事実」の横に「此書何卒得度存念に御座候」とある。いづれも江戸や平戸の山鹿家で読んでいたものであろうが。これらからの推測であるが明倫館時代の兵学教育より一歩進んだカリキュラムによる兵学教育を考えていたのかも知れない。(三九六)安政五年の始には撃剣・水練さらには準銃なども行っていた。(四一三)

右のように初等教育と共に中等教育的な兵学教育も行った外に、次のような高等教育もあった。「是日、塾徒東山に演銃す、童子皆従ふ。進退坐作甚だ困しむ。燭下猶ほ首を聚めて読誦す。声戸外に徹る。倦みては則ち伏臥す。而して三人(中谷・高杉・許道)まさに深談密語し、時に急にして身に切なるものを講究す」(三三四、安4・9・16)と。このあたりから村塾記の理想面につながるのではあるまいか。

(三) 学校論への展開

「武教全書講録」(三九七)は安政三年八月二十二日から幽室で武教全書を講義した時の要綱である。この講義は十月六日まで続いたが内容は武教小学の講義で終わっている。この中で武士たちは城下の都市を離れて田舎に退処し自らを養い、家族子孫を養うべきことを論じてい

る。(三三三) 玖村敏雄も中泉哲俊もこの考え方を学校論として「田園士塾」の思想と同じとしてとりあげてある。(注1) 田園士塾の思想は一八九八年(明31)にドイツのヘルマン・リーツによって実践された新しい学校ともいえるもので、都塵を離れた土地に校地を定め、生徒を全員寮に収容し、学校生活を勉学と作業との結合で行い、活動的実践的な人物を養成しようとした。海外に雄飛できる人物を養成しようという教育的着想からであった。松陰の方が四十年も早いことにはなるが、前記の中泉は、これは荻生徂徠の説の展開であるといっている。(注2) 徂徠の説は当時の封建社会の中の富国強兵の着想であって、教育の方からの着想ということはできない。松陰自身の論もこれ以上には展開していない。

同じ「武教全書講録」の中の「子孫教戒」(三二三)の中で家庭教育と女学校論が述べられている。家庭教育については妹たちへ与えた次の手紙の中にも述べられているが、これらは多くの成書に引用されているので省く。またこれらは封建制度の中の家教育論であるし、これから発見することもないのでその文献名だけをあげておく。

- (一) 妹千代に与ふ (安元・12・3) (五三三)
- (二) 妹千代に与ふ (安元・12・16) (五三七)
- (三) 妹千代に与ふ (安2・1・1) (五三三)
- (四) 文妹久坂氏に適くに贈言(安4・12・5) (三三四)
- (五) 妹千代に与ふ (安6・4・13) (六二五)
- (六) 妹千代へ平田家訓を送る(安6・5東行前) (六三三)

次の女学校論も武士を中心にした女子教育論といえる。

「女子の教戒には別に一策あり。是は国政上の事なれば容易に論すべきあらざれども、事の因みに茲に附録す。国中に於て一箇の尼房の如き者を起し、女学校と号し士大夫の寡婦年齢四五十以上にて、貞節素より顕はれ学問に通じ、女工を能くする者数名を選挙し、女学校の

師長となし、学校中に寄宿せしめ、扱て士大夫の女子八歳若しくは十歳以上の者は日々学校に出だし願に因りては寄宿も許し、専ら手習・学問・女功の事を熟練せしむべし。教法極めて厳整を要す。(中略)女教の本は恐れながら君公の後宮より始むべし。後宮へ貞節にして学問ある事(中略)儉勤貞静を以て一国の女教を率ゆべし。凡そ生を天地間に禀る者貴となく賤となく、男となく女となく一人の逸居すべきなく、一人の教へなかるべきなり(三三三)と。女工とは女紅ともいい裁縫・技芸などを女子の教養と考える立場のことばで明治の当初にあった庶民の女子教育のためにあった「女紅場」と共通するものである。藩公の後宮が範を示せということ及び女教の目標を儉勤貞静とするということは、当時としてはなかなか云いえぬ事であったろう。しかし松下村塾記の教育目的と比較するとき、技術的なものになる。むしろ最後に述べている「凡そ生を天地間に禀る者、貴となく賤となく男となく女となく」の立場から、もう少し掘り下げてほしかったと思う。松陰の母や妹たちへの思いやりを中心にすればその展開は可能であったと考えるが、やはり時代的な思想を超えることは無理だったのかも知れない。

註1 玖村敏雄著 吉田松陰の思想と教育(三三頁以下) 岩波書店(昭17)

註2 中泉哲俊著 日本近世学校論(五六頁以下) 風間書房(昭51)

次に安政五年に書かれた「作場付学校論」(四七)を概観しよう。この一論に私は特別の発見があるのではないが、今迄の松陰の教育思想の集約とも見える所が出ていたのでここにあげる。

「人材を聚めて国勢を振ふこと、今日の要務なり。而して人材一たび聚まらば則ち国勢振ふを期せずして而も振はん。」の立場から、(一)人材を養成するものは学校であること。(二)その人材は貴賤にかかわらず、浅深を問わずにあげること、(三)しかも他国人でも入学させてよいこと、(四)そのねらいは成徳達材であること、(五)規則で縛らず自由な雰

囲気で学習させること。(六)しかも工業技術に関する部局に所属して「作場をおこしこれを学校に連接する」必要を説く。当時の士農工商的思想からいえば卓見といわねばならない。

松陰はその死の直前にもう一つの学校論・尊攘大学校論がある。(六四二、安6・10・20)松陰は処刑せられると知って父叔兄に永訣書(六四七)を書いた同じ日に、入江杉藏に宛てた手紙で「兼ねて御相談申し置き候尊攘堂の事、僕はいよいよ念を絶ち候この上は足下兄弟のうち一人は是非僕が志を成就いたし呉れられ候事とたのもしく存じ候」(六四二)といい、「尊攘堂の事に付ても一策を得たり。(中略)京師に大学校を興し、上天子親王公卿より下武家士民まで入寮寄宿等も出来候様致し、恐れなから、天朝の御学風を天下の人々に知らせ、天下の奇材英能を、天朝の学校に貢し候様いたし候えば天下の人心一定仕るに相違なし」(六四二)そのためには「学問の節目を糺し候事が誠に肝要にて、朱子学じやの陽明学じやのと一偏の事にては何の役に立ち申さず尊王攘夷の四字を眼目として何人の書にても何人の学にてもその長ずる所を取るようにすべし」(六四三)と。

松陰の尊攘堂大学の構想は明治の教育政策と直接関係はないが、明治元年に復活した学習院で漢学国学が対立し結局両成敗でつぶれてしまった事を思うと松陰の予見は当たっていた。作場付学校論の思想は東京における「学舎制」の学科に相即しているといえよう。

以上の学校論は松下村塾の構想と直接関係はないけれども、村塾教育を考察する背景としてはやはり重要なものとみることができよう。

三、松下村塾に於ける教育実践

(一) 村塾における教育の形式

丁巳日乗は安政四年正月から二月十一日までの日記である。(七四三)その数日の状況を抜粹する。

八日(一月) 外史新田氏を読む。謙蔵・彦介・梅三郎・繁之助・徳民・栄太郎。午後、謙蔵・彦介・繁之助・梅三郎・徳民・栄太郎のために孟子を講ず。(以下略、印は論者の附記)

十日(前略) 夜孟子会講、徳民・岡部・玉木・栄太・春哉・佐々木謙蔵。会后栄太・徳民と経済要録を読む。(以下略)

十一日(前略) 亥後栄太・春哉至、春哉のために医学之要を論ず(以下略)

十二日(前略) 是日中谷猪之助至、農事を談ず。極めて盛(以下略)

十三日(前略) 栄太来る。終日自業、一字も対読せず(以下略)(四四)

この日記文の中に対読、講ずる・のために読む・自業・談ずる・論ずるなど諸種の表現があるが、これらは村塾における授業形態を現わすものである。また兵学に関連しては撃剣や演銃あるいはこれらの実習を行った。(四三)さらには松下村塾生が須佐の育英館に行き、逆に須佐から松下村塾の方へ塾生が来、交流学习が行われた。また他の塾からも来て銃陣の教授もうけた。(四五、四六)これらの学習に伴って作文課題もあった。左の一例は作文課題というよりはもっと切実感のあるものだが、品川弥二郎に与えた課題である。

村塾策問一道

「恭々しく今茲三月二十日の勅諭を捧読するに、天情皇神を畏れて烈聖を重んじたまふ。恨むらくは幕府墨夷(米国)と交通す。因つて幕府に令し、三家諸大名をして心を竭し建言せしめたまふ。事すで行下す。思ふに幕命日ならずして吾が公に下らん。吾公の奉答もとより賢籌あらん。何ぞ微臣の過憂を待たん。然れども傍観すべからず、もし或は下問を辱くせば、亦まさに何を以てなさんとするや。諸君生平書を読む、志もとより皇室にあり。情常に夷虜を慨く。それ嘗つて見る所を疎ねて悉さざることあるなく、以て下問の日を待て」(六三)

右は初等及び中等程度の知識能力をもつものへの授業形態だったと考えることができる。また(二ノ口)の末尾)の引用文の如く、「時に急にして身に切るるものを講究」した高等の部もあった。その様は右につづけている所でわかる。即ち「暢夫(高杉)首を揺り声を抗げて曰く天地と人と皆氣のみ。人苟も氣を養へば以てなすあるべし。正亮(中谷)曰く君を楠公に致し身を赤穂に処く、果して可なりと。許道独り默然退坐して一語を出さず。之を叩けば則ち曰く、吾が師新に我を戒むるに詩を廃して書を読まんことを以てせらる。吾まさにその言を思ふなりと」(三三)この場合は塾生のレベルもその内容のレベルも高いものであったが、次のように身に切なるものを切実な学習を通して教えたこともある。

「一日、有隣と士風を論ず。無咎・無逸・市(之進)・溝(三郎)皆これにあり、夜深うして燈炷る。談岸田生の事に及ぶや、余の憂ひ色に見はれ、一坐默然たることこれ久しうす。無逸慨然として煙管を把つてこれを折る。曰く吾それこれより始めんと。無咎と市・溝と声応じて管すでに分かたる。有隣曰く爾が輩審してよくかくの如し。吾いづくんぞ折らざるを得んやと。因つて余をして之を折らしむ。余曰く煙は飲食の餘事と雖も慣れては性となる。吾が性煙を憎むこと甚だし。然れども諸君一時の恍惚終身の無聊を致さんことを憂ふるなりと。有隣・二無憤然として悦ばずして曰く、子吾が言を疑ひたまふか。今岸田生と市・溝と年皆十四にして公然煙を嘯むこと長老先生に異なるなし。而して当今拳世皆然り、吾輩いづくんぞ一岸田生のために然らんや。子尚吾が言を疑ひたまふかと。余再拜し罪を謝して曰く、諸君果して然らば松下の邑、それこれより起らん。吾の憂ひ以て解くべきなり。吾、それ筆を提げてこれを記せんと。丁巳九月三日夜、二十一回猛士謹んで記す。

明朝この文をとり、岸田生のために講解一番す。言終らざるに生俯

伏して涕泣し、時を過ぎて乃ち止む。生遂に一語もなし。而して余も亦敢へてこれを責めず。後数日、生ことごとく煙具を以てその親家に送致し、敢へて復た吸はず」(三三〇)

「時に急にして身に切なるもの」の一つとして、塾生たちに名字説または送序を作って個別に指導が行われた。これについては項を改めて論じたい。

かつて幽室における教育にカリキュラムがあったとはいえないと論じたが、松下村塾の場合も同じであるからとりあげないことにする。然しその中の広さは大きくなっていった。「十数歳の童、傍訓を仮らずして文字を読む者駸々として輩出す。(中略)然りといえどもこれ皆漢学者流のみ。又二生あり。一に加茂・本居二先の軌轍に従ひ、古学を講じ古書を読まんと欲す。一は水藩及び頼氏の流派にさかのぼり、国体を明らかにし皇道に通ぜんと欲す。是れ益々樂しむべきなり」(甲五三)というように、塾生の中で自分の好む所に従って経史・子・集あるいは国学・史論などを選んで学習するようになっていく。こうした自由さの中で学問が行われたのである。

次にこうした自由な学習を進めるためには必然的に塾風にも特色がなければならぬ。

自非読万卷書

寧得為千秋人

自非輕一己勞

寧得致兆民安 (三三六)

これには久保翁の囑によるとある。久保主宰の松下村塾に贈ったものではあるが、松下村塾記がそうであるように、松陰の松下村塾の塾風を語るものとして誤りはない。

「松下村塾の増築の議決す。頃日搬土運石一も雇徒を煩はさず、撃剣已に盛にして又搬運に任ず、塾子の風それ文弱を患へず。三月十一

日構造粗々成る」(八六六、安5・3・11)

「村塾、礼法を寛略にして規則を擢落するは以て禽獸夷狄を学ぶに非ず。以て老莊竹林を慕ふにあらず。ただ今世は礼法の末造流れて虚偽刻薄となれるを以て誠朴忠実以てこれを矯揉せんと欲するのみ。新塾の初めて設けらるるや諸生皆この道に率ひて以て相交り、疾病艱難には相扶持し、力役事故には相労役すること手足の如く然り。(中略)是を以て会講連業未だ嘗つて縄墨を設けず、交ふるに諧謔滑稽を以てす。(中略)近ごろ米をうすづき圃を鋤くの挙のごとき、亦此意を寓するのみ。(中略)之を要するに学の功たる気類先づ接し、義理従つて融る。区々たる礼法規則のよく及ぶ所にあらざるなり」(四一六、安5・6・22)

「此節大いに暑中に候得共甚壮なり。隔日左伝・八家会説、勿論塾中常居、七つ過会説終る。夫より畠又は米春、在塾生とこれを同じうす。米春大いにその妙を得たり、大抵両三人同じく上り、会説しながらこれを春く。史記など二十四五葉読む間に米しらげ畢る亦一快なり」(六四四、安5・6・28)

右三篇からみて松下村塾では規則がなかった。自由な雰囲気の中でこそ、「気類先づ接し義理従つて融る」の原理があると見たのである。これを現代風にいえばレポートのある所に真実の教育があると言っていることになる。

(二) 松陰における教育の契機

安政二年から松陰は急に「送序」「名字説」「贈言」を書き出している。玖村敏雄は「吉田松陰の思想と教育」(昭17、岩波書店)でこれらを個性教育についての重要文献であるとして取上げ、それについて論じているのであるが、松陰が始めからそれを有力な教育手段として意識的に用いていたかどうかについては疑問がある。先にも述べたように松陰は、文章は自分の誠意を傾けて書くべきものとしてしていることから、これらの送序・名字説などがその立場と態度で書かれていること

は疑いを入れられない。当時の社会慣習として送序や贈言がよく行われたことであるから、始めはその例にならったものと思う。しかし誠意をもって書くとなれば、その本人のことを具体的に知っていなければ書けないことであり、その本人を知って書くとなればその人の発展向上を願うように書かれるのは自然である。そうした経過の中で、その教育効果の大きい事に気付き、積極的に利用するようになったものと考ええる。まず送序・名字説・贈言を年代別にあげてみよう。

- 1 送松村文祥序（弘化三年）（二二六四）
- 2 賀児玉君拜管美島軍事序（嘉永三年閏四月）（二二六七）
- 3 送佐伯驪八役美島序（嘉永三年十月）（二二七三）
- 4 送中村士恭婦国序（嘉永四年八月）（二二九七）
- 5 送久保清太郎東役序（安政二年二月九日頃）（二二二三）
- 6 弘字毅甫説（安政二年三月一日）（二二三）
- 7 送赤川淡水遊学常陸序（安政二年三月六日）（二二六〇）
- 8 送桂小五郎序（安政二年五月七日）（二二三五）
- 9 徳字有隣説（安政二年七月四日）（二二三）
- 10 寛字士栗説（安政二年八月六日）（二二三）
- 11 縮字守約説（安政二年八月六日）（二二三）
- 12 送古助遊学江戸序（安政二年八月十三日）（二二五五）
- 13 土屋恭平遊学江戸序（安政二年八月二十七日）（二二七七）
- 14 送良三東役序（安政二年九月六日）（二二三〇）
- 15 行昭字明卿説（安政三年四月四日）（二二三）
- 16 送浄土真宗清狂師応微本山序（安政三年七月二十四日）（二二四〇）
- 17 送萱生玄順叙（安政三年十二月一日）（二二三〇）
- 18 贈松浦生序（安政四年三月十三日）（二一九八）
- 19 秀実字無逸説（安政四年五月三十日）（二二〇一）
- 20 送松浦松洞之大津貌烈婦叙（安政四年七月九日）（二二三〇）

- 21 贈音三郎（安政四年八月六日）（二二三七）
- 22 贈市之進（安政四年八月九日）（二二三七）
- 23 溝三郎説（安政四年八月）（二二三〇）
- 24 送吉田無逸序（安政四年九月五日）（二二三一）
- 25 送富永有隣婦省叙（安政四年九月十五日）（二二三四）
- 26 実之字賓卿説（安政四年十月三日）（二二三六）
- 27 贈馬島甫仙（安政四年十月十三日）（二二三九）
- 28 送児玉士常遊九国四国叙（安政五年一月二十三日）（二二二一）
- 29 送日下実甫東行序（安政五年二月）（二二二一）
- 30 自書送実甫叙後（同右）（二二三）
- 31 送清狂師婦郷序（安政五年三月一日）（二二三六）
- 32 無窮説・送無窮東遊（安政五年三月三日）（二二三七）
- 33 贈中村理三郎（安政五年三月十五日）（二二三）
- 34 送中谷賓卿叙（安政五年三月下旬）（二二三）
- 35 送久保清太富永有隣及村塾諸子同荻野時行遊嵩佐叙（安政五年三月下旬）（二二三〇）
- 36 須佐七生婦邑贈言（安政四年四月二十九日）（二二三七）
- 37 送杉藏叙（安政五年七月十一日）（二二八六）
- 38 送生田良佐（安政五年七月十五日）（二二八七）
- 39 送高杉暢夫叙（安政五年七月六日）（二二九六）
- 40 送福原清介叙（安政五年七月二十三日）（二二一〇五）
- 41 送六人者叙（安政五年七月二十六日）（二二一〇六）
- 42 送尾寺新之允叙（安政五年八月四日）（二二四七）
- 43 送富樫文周叙（安政五年八月七日）（二二四八）
- 44 送竹下琢磨婦邑叙（安政五年八月二十五日）（二二五〇）
- 45 送生田良佐婦邑叙（安政五年九月二十四日）（二二五〇）
- 46 子楫・子徳・子大説（安政五年十二月十一日）（二二六四）

47 日孜字思父説（安政五年三月九日）（四六八）

48 益壯説（安政六年二月三日）（四二六三）

49 常一字君儀説（安政六年一月二十五日）（四二九〇）

50 送和作叙（安政六年二月三日）（四二二三）

51 利実字去華略説（安政六年五月六日）（四二五七）

1と4とは共に友人に対するもの、2と3とは儀礼的なもの、1と4は友人への送序であるが、これらから友人の人物はわからない。安政二年に十本の名字説と送序を書いている。5・7・8は何れもよく知っている友人ではあるが、「吾が友赤川淡水は齒富み才足り志高く氣旺なり。蓋し後進の袖領なり」（7・二三）「吾が友桂生五郎は武人なり。遊方四年、一たび帰り復た行く。書を致たして別れを告ぐ、吾因つて自ら嘆ずる所以のものを書して以てこれに贈る」（8・二三）とのべているが、赤川や桂の人物像が浮んでは来ない。6の弘字毅甫説について詳しくみよう。

「叔父玉先生の令嫡彦介、寅に於ては従弟たり。書来りて曰く某日は吉なり。將に冠せんと。寅乃ち先生に請ひて曰く、古は冠して字す。その之に字せるものありやと。先生曰く未し、汝ためにこれを撰せよと。寅、弘字毅甫をつくらむと請ふ。且つこれが説をつくる。曰く士は以て弘毅ならざるべからず、任重くして道遠し、惟だ弘のみ以て天下の至重に任ずべく、惟だ毅のみ以て天下の至遠を致すべし。これは万犍の牛の大倉粟を運ぶに譬ふべし。弘にして毅ならざる者は鉄牛にして行くべからず、毅にして弘ならざる者は野牛にして羈ぐべからず。皆飛俛の数に益なし、人は渺々の身を以て霄壤の間に生まれ、心は天地に通じ、道は古今を貫く。上は君父の深思を荷ひ下は師友の重責を負ふ。弘なる者は或は毅なくんば弘にも非ず以て毅なるなし。毅なる者は或は弘なくんばすなはち毅にも非ずして以て弘なるなし。古に曰く冠なる者は成人の道なりと。成人の道蓋しここに過ぎ

ざらん。弘字毅甫の説をつくる」（二二三）

彦介は松陰の従弟であり、東北亡命による屏居中にも学んでいる。その頃は十一・二歳であった。その性格も能力もよく知っている筈でありながら、その人格については何もふれていない。全く抽象的な人物に弘字毅甫とつけているのと差異はない。これより四か月あとの「9 徳字有隣説」を見てみよう。有隣は野山獄時代の同囚である。

「富永徳、字は有隣、自ら見るに甚だ高く群小を疾むこと仇敵の如し。是によりて時流の擯斥する所、親戚の容れざる所となる。嘗つて流に処せられ尋いで獄に錮せられ、已に一年。余も亦罪有りて獄に陥る。相得て喜び甚し。一日有隣余に更めて名字を選び且つその説を作らむことを求む。余曰く君の名字甚だ善し。更めるべからず、孔子曰く徳は孤ならず必ず隣有り」と。徳にあらざるば以て隣を得るなく、隣に非れば以て事をなすなし（中略）然らば則ち君のここに至る或は亦徳以て隣を得ることなかりしか。而して今や二人相得たり。徳と不徳とを知らずと雖も豈隣なしといふべけんや（中略）君もし此説を存して以て世に接し己を以て人を責むるなかれ。一以て百を廢するなかれ。長を取り短を捨て心を察し跡を畧らば則ち天下往くとして隣無からん（中略）抑々吾れ君の状貌を相するに獄に死する者に非ず。徳を修め隣を得る亦以て事をなすべし。是れ君に在るなり。有隣乃ち嘆じて曰く、味あるかな言や吾未だこれを前に聞かず。（中略）吾及ばずと雖も敢えて勉めざらんや」（二二三）と。

有隣の人柄がよく出ている。その問題点を明示し、これを改めて隣を得よといっている。いかにも誠意にあふれた文である。

10は司獄福川に依頼されたものであるが、その人がわからないから百字にも足らない短いものである。11は司獄福川犀之助に与えた名字説である。

「余罪を獲て獄に下る。獄司福川氏余に従ひて業を請ふ。余その懇

篤なるを愛し傾倒遺すなし。福川氏大いに喜ぶ」(三三三)として縮字は守約とした意を解説している。また土屋肅海に福川を紹介する文の中でいう。「家兄將に福(川)守約を拉し足下に見えんとす。因りて一書を附して以て足下に托す。足下幸に守約を奨励せよ。守約は学識言ふべきものなしと雖も氣性亦略々愛すべし」(三三三)と。ともに福川の人柄氣性をとらえて発言しそれらを「愛すべし」といつている。

12 13 14の三編は友人及び友人の弟であるから、当然その人柄や志について知っていただろがそれについてはふれていない。15からは安政三年に入る。15は同囚吉村善作に与えた名字説である。獄中教育の始からの協力者である。従って「獄に入りてこのかた、始めて其人を知る、これを奇とす。その人沈静簡傲、頗る同囚を服せしめ嘗つて俗書を以て童穉の師となる。又俳諧を善くして家をなす。この二事ありて自ら世に廃せられざるに足る」(三三三)と。よく人物を知っているが、残念乍ら15の名字説ではこれにふれていない。しかし同囚で協力者であった河野数馬には送序も名字説もないが、その免獄のために小田村伊之助宛に紹介した文にいう。同じく安政二年七月である。「河野の人となり僕深く洞悉す。偏狭小狡の所も多し。但其才用ふべき所あり。且つ義に遷りやすき一種の質あり。亦愛すべきのみ」(三三七)以上みたように安政二年から三年にかけて人間の内面に眼を向けるようになって来た。安政四年の送序・名字説も十本あるが、その中でその人の内面にふれていないのは18・20・25の三編だけである。そしてその内面について「愛すべし」の発言がふえてきている。

(三) 松陰における愛

安政四年から五年にかけて松陰が「愛す」といった言葉がどのように出ているかを探ってみよう。安政四年は松陰二十八歳で、前年の十月頃には免獄運動が効をあらわし、同囚のうち七人が放免されたことになり、この年の三月には友人久保清太郎が江戸より戻り、松陰の教

育に協力をした。七月には出獄した富永有隣が賓師として招かれ、十一月には村塾は松陰の実質的な主宰になっていた。安政五年は外交問題で世情は騒然としていた。村塾はそうした中で発展し、七月には家学教授が藩から正式に許された。しかし松陰の言動は次第に過激になっていく時期である。

「無逸三生を拉し余に造り託をなす。曰く音、曰く市、音(三郎)は温詳にして市(之進)は穎脱、その人皆愛すべし、而して末座の一生は商家の遊倅なり。年甫めて十四、頗る市井の氣あり。余心にこれを厭ふ」(三三六、安4・8・19)

吉田無逸が江戸に行くことになったので、自分が面倒をみていた三人の不良少年を松陰の所へつれ来てその教育を依頼した。そのうち音三郎・市之進とは「愛す」べきものだが溝三郎は「きらい」だといっている。

「村塾の一生馬島甫仙なる者あり、家世々医師なり。年甫めて十四、書を読むこと極めて敏、余深くこれを愛す」(三三六、安4・11・3)

「今日より詩経会初る、山根生来る。生中々氣魄あり、愛すべし」(三三六、安5・2・28)

「中村生論語科をおさむ。能はざるを以て病と称して出でず(中略)いくばくならずして来たり余に従ふ。余その性の勤苦に勝ゆるを見、頗るこれを愛す」(四三三、安5・3・25)

「貴邑少年中内藤生頗る氣力あり、僕甚だ愛し申候。何卒御勉強再遊をも致す様御申伝下さるべく候」(三三六、安5・4・29)

「天野清三郎は中々の奇物、他人未だ深くとらず、僕獨りこれを愛す。(中略)提山坊主大いに進む。利介亦進む。中々周旋家になりさふな(中略)直八も折折塾へ来て食を炊いて宿する組の者、中々の奇男子なり。愛すべし」(三三六、安5・6・19)

天野清三郎は後の渡辺嵩藏で長崎造船所の創設者になった人物、提

山坊主は後の男爵松本鼎、利介は伊藤博文、直八は明治元年越後朝日山の戦で死、正四位を贈られている。

「僕謂らく亦才を愛するの一籌なり」(四八、安5・7・5)

「桂・赤川は吾の重んずる所なり。無逸無窮は吾の愛する所なり、新知の杉藏は一見して心ゆるす、此五人者は皆志士なり」(四九、安5・7・18)

「此生は伊藤利輔と称する者にして、胥徒未だ役なし。反つて好みて吾徒に従ひて遊ぶ。才劣り学穉きも質直華なし。僕頗るこれを愛す」(四六、安5・10・8)

「和作は年少心元なく候へども亦鋭果愛すべき者に候」(六一、安5・12・21)

以上愛するの言葉の用いられている文を拾ったが、安政四年に二か所、安政五年に八か所がある。

安政六年は松陰の最後の一年である。時局は松陰にとって耐えがたい状況だった。一月二十四日から二十五日にかけて時事に憤慨して絶食に入った。父母や叔父の諫めと共に家囚になっていた野村・品川・無逸らの放免によって夜から食事をとったが、この頃友人や門人たちに最もきびしい批判をもった。この時、門人についての長文の評を書いて、入江杉藏に送った。この中の愛にかかわる部分を引用しよう。

「汝(入江)の識高く胆大なり。吾の愛敬する所なり。恨むらくは才足らず、学もつとも足らず、怨讎の氣過当、是れ汝が病なり(中略)吾の平生最も愛する所は子楫(岡部)無逸(吉田)なり。無逸はその才の敏なるを愛し、子楫は吾その氣の鋭なるを愛す、皆その己に似たるを愛す、皆吾が過なり(中略)福原(又四郎)は外優柔に似て、智を以て之に足す。子楫の鋭氣愛すべきに如かず(中略)子大(作間)は俗論中にあり。顧みて能く自ら抜く。篤信と謂ふべし。亦些か頑骨あり。愛すべし」(四二、安6・1・27)

この長文の中に高杉・久坂・佐世・松浦・増野・有吉・品川・天野・国司・時山・杉山・伊藤(伝)・山縣、太郎の十四人をとりあげている。ここでは松浦・増野・品川・天野・子楫・無逸・作間を愛すべしといい、高杉・久坂・入江には愛敬又は敬愛といい、佐世・福原・有吉・杉山・伊藤(伝)・山縣・太郎には愛するとは言っていない。

安政六年に入ってからのもので拾ってみよう。

「是れ子楫の長所、吾の最もこれを愛し、吾の最もこれを虞る」(四三、安6・1)

「子楫・無咎輩は口舌喋々。老兄(久保)を知る能はず(中略)但喋々も亦才なり。誠に獲やすからず。僕故にこれを愛す。然れどもいずくんぞ愛する所を以て、その信ずる所を疑はんや」(四六、安6・1・29)

「議論好し。文学も亦佳し。(中略)文情飛躍子徳の文才、愛すべし。愛すべし」(四四、安6・3カ)

「日下(玄瑞)は(中略)僕素より敬愛するところなり。御安心下さるべく候(中略)弥次郎(品川)大いに是れ有情の少年、愛すべし愛すべし。(中略)徳民・作間兩人弥次と全く同意。この三人少年と雖も恃むべし」(六三、安6・5・13)

「思父(品川)は年少にして能く我を敬するを知る、われ是を以て深く思父を愛す」(四五、安6・5・21)

「人言ふ、仙吉(国司)は折くと。仙吉豈然らんや。今吾は苦言す、仙吉を棄つるに非ず、乃ち仙吉を愛するなり、これを識れ」(四五、安6・5・21)

「(子楫)子遠、八十は最も善く足下を知る者これを親しみ、これを愛せよ」(五五、安6・5・25)

「俗吏中長谷川彦次郎、性質敏捷志気あり、甚だ愛すべし。その他四五人愛すべきものあり(中略)従行中地方直横目小七(郎)愛すべきの志士なり。(中略)余去るに臨みて曰く、杉藏の思、玄瑞の才、清太の

知、皆吾己上の人なり。三人相親。愛せよ」(六二六、安6・7・中句)
 長谷川や小七は松陰の門下ではないが、その人物の中に愛すべきものを見出しているわけである。

「高杉は真に能く僕を知る、亦能く僕を愛す。爾後もし意あらば書を寄せよ」(六三六、安6・8・13)

以上の引用例で共通してみられるのは、松陰が愛する対象は門人らの個性的なところである。それが性格・性質であったり気魄のあるところ、或は才能や頑質であったり、奇という変った一面であったりする。口舌喋々と非難めいた才をも愛するという。これについての松陰の反省は「皆その己に似たるを愛す、皆吾が過なり」(四二四、安6・1・27)である。なぜわが過だといったのであろうか。松陰が人を愛し好きになったのはそれぞれ理由があった。その理由を推究すると松陰自身の個性的な面に似たところが愛するに至った原因であるにとらえた。嘗つて松陰は教育の原理として「気類先づ接し、義理従つて融る」(四八三、安5・6・22)にとらえた。気類の接する最も端的なみちは相手が好きになることである。松陰が門人を好きになった契機は己に似たところだと反省した。しかし松陰の好きになった個性的な面は、志気・才の敏・気の鋭・奇男子・頑骨といった面であった。これらは教育的に価値をもつものと教育的には疑問のあるものとがある。教育的に価値のないものを愛するとか好きというのは松陰といえども誤である。松陰にとって個性的な面は教育へのよい手がかりであり、契機ではあった。この区別に気付いたのが、「わが過なり」と発言した意味である。私はとらえる。だから「いずくんぞ愛する所を以て、その信ずる所を疑はんや」(四三六、安6・1・29)という。門下生の個性的なるものの中には発展の期待できるものとできない面とがある。松陰の愛したのはこの両面だが、信頼するのは発展が期待できる面ではなくてはならない。だから愛する所を以て信頼を傷つけてはならないとい

うのである。だがこのあたりの教育の本質論についての理論化は十分である。しかしそれをよく理解しそれを実践していたと考えられるふしがある。天野清三郎は他人から認められないし、また本人も他人をなかなか認めない人物であったが、「天野は奇識あり、人を視ること蟲の如く、その言語往々にして吾をして敬服せしむ」(四二五)と、すなはち奇識にとらえ、敬服すると彼に信頼を示した。そして「(天野が)誠に李卓吾の如きを得てこれを師とすれば一世の高人物たらん」(四二五)と期待し予言をしている。

教育における愛の契機についてはこれから一か月半後に次のように理論化されている。

「吾さきに子遠に与えていふ。「思父(品川)は事に臨みて驚かず」と。今は品目を改めていふ。「悪をにくむこと太だ厳し」と。この品目は亦今日より始まるにはあらず(中略)伯夷の聖清も亦悪をにくむの極のみ。しばらく佳不佳を論ぜずしてこれを思父の真骨頭といふ。すなはち得たり。悪をにくむ、生来の稟得資質なり。故にこれを真といふ。学問はすべからく己が真骨頭を求め得て然る後に工夫を著くべし」(四三六、安6・3・12)と。

松陰は思父が悪をにくむということは学問によって身につけたものでも、師友によって与えられたものでもない。今日的にいえばそれが個性だといふのである。学問は真骨頭から工夫を著けよというのは自分の個性を明らかにしその個性を純化することすなはち個性を教育的に価値をもつものになるよう工夫すべきだといっていると解して誤はないであろう。

かくて松陰の到達した教育の契機は愛であり、それは門下生たちのもつひとりの個性的なものの洞察から始まり、教育的価値をもつ門下生たちへの信頼と期待になり、教育的予言が本人や周囲の人々へ発せられるのである。こうしたものの相互交流の中に、松陰の教育は偉大な効果を発揮していったと考えることができる。